

---

# とある科学の決闘世界(デュエルワールド)

わらびもち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の決闘世界<sup>デュエルワールド</sup>

### 【Nコード】

N1290S

### 【作者名】

わらびもち

### 【あらすじ】

すべての記憶を失った少年は、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の少女、初春飾利と出会う。彼の能力、決闘世界<sup>デュエルワールド</sup>とは一体何なのか。そして彼の正体とは。科学と魔術と、決闘が交差する時、物語は始まる——！！

『禁書』のネタバレを含みます。

ヒロインは初春さんです。

更新が極端に遅いです。

あなたの知ってる初春さんじゃないかもしれません。

決闘サイドがあまりにも少ないので、デュエル分かんない人もお楽しみいただけます。

もはや遊戯王関係無くなってます。

第一話 記憶消失（ロストメモリー）（前書き）

実は、まだ主人公のデッキは決まっておません！！なので、今回は非決闘回です。

では始まります！

第一話 記憶消失（ロストメモリー）

「……………」

「……………ん…？」

彼はゆっくりと瞼を開けた。すると、そんなに高くないように見える天井が目に入る。

（ここは…？）

ボーンとする頭を動かす。すると、

「あ、気が付きました？」

飴玉を転がすような甘ったるい声に、彼は思わず眉をひそめる。どうやらここは私室のようだ。まるで学生寮か何かに見えるが…

足音が聞こえたので、彼は声の人物に目を向けた。

どうやら中学生くらいの女の子のようだ。頭に造花の花飾りが見える。まるで大きな花瓶を乗っけているみたいだ。

「うちの玄関先」っていつても寮ですけど」に人が倒れていたの、思わず連れてきちゃいました。大丈夫ですか？」

「……………」

「その制服、こころへんの学校のものじゃないですね。どこのですか？」

「…制服？」

彼は自分の身なりを確かめた。確かに学ランと呼ばれる服を着ている。

「あ、質問ばかりでごめんなさい。…あなたは？」

「え？」

「名前とか、住所とかですよ。こう見えても私は風紀委員ジャッジメントなので、近くに住んでいるなら送ってあげますけど…白井さんが」

少女は最後の方を小さく呟いたが、

「って、どうしたんですか？」と少し取り乱す。

彼が頭に手を当てたからである。

「…分からない」

「え？」

今度は少女が聞き返した。

「分からないんだ。自分が誰なのか、今まで何をしていたのか。」  
彼には…栗ほどの記憶さえ、なかった。

少女の名前は初春飾利といった。前述した通り、風紀委員をやっているらしい。

らしい、というのは少女がとてもそのように見えないからだ。今時セーラーの夏服すら似合わないのは珍しい…はずだ。多分。

彼は自分自身の事が何一つ分からないのに、学園都市や風紀委員についての知識は持っているのに驚いた。一般常識と思いに、どんな違いがあるのだろうか。

「じゃあ書庫バンクを覗いてみましょうか？せめて在学校と、能力は知っておきましょうよ」

「……俺の…能力」  
能力、と聞いて彼の頭の隅っこの何かが自己アピールを始めたよう  
な気がするが、彼は気にしない。それよりも在学校のほうが気になっ  
た。

まるでオフィスの一室のような、風紀委員一七七支部。

そこに、彼の人生の切れっぱしが書庫に記載されていた。彼の顔画  
像の隣にあったのは――

在学 第二十八学区第三高校一年（オーストラリアへ留学中）

能力      LEVEL 1

デュエルワールド  
決闘世界

名前も分からないのにどうやって検索できたかはできれば聞きたく  
ないとして、

「ひどい…こんなのが、書庫に…」ショックを受けたように顔を伏  
せる初春。

学園都市には、第二十八学区は存在しない。

簡単に分かると思っていた彼の身元は、思いのほか遠いところにあ  
った。

「……！」  
彼はふと、振り返って虚空を見つめた。身を浅くかがめる。なぜそんな事をしたのかは分からなかった。身体が勝手に反応したのだ。この部屋には、やたら嚴重なロツクを突破しないと入れないはずだが

——その瞬間、何も無いはずの空間に一人の少女が現れた。

「……！！」

彼は驚いた。いきなり人が出現したから、ではない。自分の勝手な反応があまりにも正確だったからだ。

「……あら？休日出勤とは、珍しいですわね初春。明日は雪でも降るのかしら？」

初春は奇跡のような速さで書庫からログアウトし、半そでで目をぬぐって、

「あ、白井さん…その方が色々と厄介な事になってたんで、はるばる歩いてきたんですよ」

「その方…？」

そこで初めて、少女は固まっている彼に目をやった。

白井黒子。能力は大能力（レベル4）の空間移動<sup>レポート</sup>。

それが、いきなり現れた少女らしい。

「まあ、記憶を…?」

「はい。私はやっぱり精神系能力者の犯行だと思います。手掛かりが全くないのがキツイですけど」

三人は、テーブルをはさんだソファに座っていた。窓の外から聞こえる風の音がうるさい。

「それと、書庫の書き換え…一体、犯人は何が目的なのかしら」

「そうですね…ていうか、白井さん空間移動で入ってこないで下さいよ」

「誰もいないと思いましたが」

彼は完全に蚊帳の外だった。ちよつとさびしいかもしれない。

「そういえば、白井さんはなんでこっちに?今日は私たち、お休みでしたよね?」

「…そうですねですよ!!」

白井は机をバン!!と叩いて、

「わたくしがせつかくお姉様とのお出かけを楽しんでいたのに、この付近でひつたくり事件が多発しているから」と要請が来て…

…!!」

「今頃、御坂さんはやつと肩の力が抜けてるでしょうね」

「ほら、その貴方も何か言いなさい!脱線してますけれど、自身自身の事ですよ!」

思わず初春までビクウツ!!となるほどの大声に、八つ当たりかよと思いつつ彼は少し尻込みして、

「…いや、その自分自身の事が分からないわけなんだが…」

その時。

また、身体が勝手に反応した。

窓まで歩み寄り、開け放つ。

「なんですかの?空調なら効いて…ちよつ!!」

彼はそのまま、飛び降りた。



第一話 記憶消失（ロストメモリー）（後書き）

どうでしたか？

よろしければ感想等お願いします。

なお、活動報告の欄でもアンケートを行っておりますので、そちらもぜひご覧ください。

## 第二話 決闘世界（デュエルワールド）（前書き）

主人公のデッキは、どちらにも一票も入らなかったため（悲）、勝手に決めてしまいました。  
次回もデュエル回です。



『面倒だ。撃ち抜け』

……命の危機と引き換えに。

「…え、ちょ、ちょちょちよっ!!」

パンパンと乾いた音とともに、ボンネットのそこかしこに穴が空く。

「ちくしょ…どうすれば…」

今こうしている間にも、穴は増え続けている。その時、

『早くやれ!! 能力者だったら厄介だ!』

「…それしかないか」

彼はとりあえず、「起動!!」と念じてみた。

途端、彼の世界が変わっていく。

全てのがセピア色へと変化する。それはクルマも例外ではない。

しかも、ワゴン車はひとりでに止まっていた。

『なんだ？何が起こって…』

『能力者だ!! 早くクルマを捨てて逃げろ!!』

クルマの乗り手の男が二人、降りてきた。一人は女性用に見える鞆を抱えている。明らかに彼らのモノじゃない。

「! なんだデメエは!!」

クルマから飛び降りた彼に、二人が気付いた。

彼はなぜ自分が彼らを追ったのかやっとなんか分かった。

同時に、追った自分を誇らしく思った。

「さあ…デュエルをはじめようぜ!!」

彼の能力は決闘世界。デュエルワールド

ひとつの精神世界を作り出す能力だ。

世界といっても、そこに入った者は必ずデュエルをしなければなら  
ない…否、デュエル以外の選択肢を脳からぬぐい去ってしまう等の

制約がある。

しかし、創造主たる彼には、たいした権限はないのだが。

「こん…のクソガキツ!!!」

「…もつとも、二人も相手にするつもりはないけどな」  
人数が合わない場合は、一人を傍観者にできる。

—— 気づけば、彼と男A以外はセピア色に染まっていた。男Bはどうしていいか分からず、オロオロしている。ほかの人はいない。精神世界には、彼が連れ込んだ者しか入れないからだ。

「デュエル!!!」

そして、その者は、必ずデュエルをしなくてはならない。

「俺のターン!!!」

男Aがドロウするのを見ながら、彼はどうプレイングするか悩んでいた。

能力の知識はあっても、経験という思い出がないためだ。

(さて、どうしようかな…)

「俺は手札から『コール・リゾネーター』を発動!!!」

コール・リゾネーター 通常魔法

デッキから『リゾネーター』と名のついたモンスター一体を手札に加える。

「俺は『ダーク・リゾネーター』を手札に加える!!!さらにモンスター一体をセットし、ターンエンド!!!」

男A 手札5 裏モンスター1

彼のターンだ。

「俺の…ターン…!」

(あれは十中八九『ダーク・リゾネーター』だろうな)

「俺は…モンスターをセットしてターンエンド」

彼 手札5 裏モンスター1

男A 手札5 裏モンスター1

「はっはあ!!俺のターン!裏モンスター…『ダーク・リゾネーター』をリリース!!」

「…っ!やばっ」

彼は動揺した。もし召喚時にフィールドを荒らす『帝』モンスターが出てきたら、彼のライフは一気に減ってしまう。戦闘耐性を持つカードを伏せたのも、自場にリリース要員を残すためだとしたら…  
……。  
しかし。

「『BF - 流離いのコガラシ』をアドバンス召喚!!」

「…え…?」

召喚されたのは、彼の予想とは全く違うモンスター。

「行くぜ！コガラシで裏モンスターを攻撃！！」

B F - 流離いのコガラシ    A T K 2 3 0 0    V S    ライトロード・  
ハンター    ライコウ    D E F 1 0 0

「はっはあ！！そんな雑魚、蹴散らして——」

「ライコウの効果発動！！」

「ダニイツ！？」

ライトロード・ハンター    ライコウ    光    2    獣族

リバーズ：フィールド上のカード一枚を破壊する。デッキの上からカードを三枚墓地に送る。

「コガラシを破壊！！」

爆碎    されるコガラシ。

「んなつ……俺の場がから空きじゃねえか！！だったら『手札断殺』を発動！！」

手札断殺    速攻魔法

お互いに手札を二枚墓地に送り、二枚ドローする。

「俺は『X-セイバー    エアベルン』、『ネクロ・ガードナー』を墓地へ送る！！」

「俺は『ダーク・クリエーター』、『貪欲な壺』を墓地に送る」

「仕方ねえ、カードを2枚セットし、ターンエンドだぜ！！」

今更だが、この男、なかなか楽しい性格をしているようだ。ひった

くりのくせに。

男A 手札2

伏せ2

彼 手札5

「俺のターン。」

(ライコウが落とした三枚は『レベル・ステイラー』『創世の預言者』『奈落の落とし穴』か…微妙だな)

「『シャインエンジェル』を召喚!!さらに、墓地の光属性モンスターと闇属性モンスターを一体ずつ…『ダーク・クリエーター』と『創世の預言者』を除外し、『カオス・ソーサラー』を特殊召喚!」

「はっはあ!!来いやあ!!」

17

(明らかに誘ってるよな、あれ…でも、まあ…)  
彼は手札のカードを見た。

(攻撃はするけど…)

「バトル!『シャインエンジェル』でダイレクトアタック!!」

「はっはあ!!かかったな小僧!!リバーズカードオープン!!」  
リビングデッドの呼び声『!」

リビングデッドの呼び声 永続罫

自分の墓地からモンスターを一体攻撃表示で特殊召喚する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。このカードがフィールドを離れた時、そのモンスターを破壊する。

(コガラシを蘇生するのか…まあ『シャインエンジェル』だし、自爆特攻してもいいか…。メインフェイズ2に『カオス・ソーサラー』で除外してもいいし)

カオス・ソーサラー 闇 6 魔法使い族

このモンスターは通常召喚できない。自分の墓地の光、闇属性モンスターを一体ずつ除外して、手札から特殊召喚できる。1ターンに1度、フィールド上の表側表示モンスターを一体除外できる。この効果を使ったターン、このモンスターは攻撃できない。

しかし、

「俺は『ダーク・リゾネーター』を特殊召喚!!」

「…な!?!…コガラシを蘇生すれば少なくともこのターンのダメージは0にできたはず…はん、そうか、そんなに除外が怖いか。いいぜ、だったらたっぷりダメージをくれてやる!!『カオス・ソーサラー』で攻撃!!」

「はっは、一つ勘違いしてるぞ小僧。」

男は裕然と笑って、

「俺はこのターン、ダメージだつて貰うつもりはねえぞ!!  
リバースカードオープン!!『チューナーズ・バリア』!」

チューナーズ・バリア 通常罫

自分フィールド上のチューナー一体は、次のターン終了時まで戦闘及び効果で破壊されない。

「っ…何やってんだ、俺は!!」

少なくとも『シャインエンジェル』から攻撃すれば、メインフェイズ2に『カオス・ソーサラー』の効果で除外できたはずだ。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

男A 手札2 ダーク・リゾネーター（攻）      リビングデッド  
の呼び声

彼 手札2 シャインエンジェル（攻）      カオス・ソーサラー（  
攻）      伏せ2

「はっはあ！！なんだその伏せは！苦し紛れのブラフかあ？だった  
らもつと苦しくさせてやるZ E      」  
そう言つて男は、

「『ブラック・ホール』を発動！！」  
「！！！」

ブラック・ホール      通常魔法  
フィールド上のモンスターを全て破壊する。

（…攻撃の準備は整つたつて事が…でも、俺のライフはあと400  
0ある。まだ何とかなるはずだ）  
しかし。

「いつまで余裕でいられるかな？俺は『X・セイバー      エアベルン』  
を召喚！」

（んなつ…あいつは…）

X・セイバー      エアベルン      地      3      獣族

このカードがダイレクトアタックによって戦闘ダメージを与えた時、  
相手の手札を一枚捨てる。

「はっはあ！！手札もライフも頂くぜえっ！！手札から魔法発動！！『イージーチューニング』！！」

「え、ちよっ、おまつ…！！」

イージーチューニング 速攻魔法

自分の墓地のチューナー一体を除外して発動する。自分フィールド上のモンスター一体は除外したチューナーの攻撃力分、攻撃力が上がる。

「俺は『BF - 流離いのコガラシ』を除外！！俺のエアベルンはその攻撃力…2300を吸収する！」

X - セイバーエアベルン ATK1600 + 2300 = 3900

「な…！！」

「くええっ！！ダイレクトアタックだあっ…！！」

彼に、巨大化したツメが襲いかかる。

4枚の伏せカードに、攻撃を防ぐカードはない。

## 第二話 決闘世界（デュエルワールド）（後書き）

今日の最強カード

『イージーチューニング』

モンスターの攻撃力を大幅に上げるぞ！！これで大ダメージを与えよう！！

感想等お待ちしております。

### 第三話 超電磁砲（レールガン）（前書き）

第三話です。

多分次話で第一章を終えます。

第二章の事は何も考えてないので、ただでさえ遅いのに、さらに遅くなる事が懸念されます。あしからず。

### 第三話 超電磁砲（レールガン）

「…う…あ…ああ…」

エアベルンのツメは、もはや彼が飛び降りた風紀委員の支部程の高さまで巨大化していた。

それが――容赦なく彼に襲いかかる。

「…っ。ぐっ、あ、あああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああっ！！！！」

ツメが地面に叩きつけられた瞬間、アスファルトが無数の瓦礫となつて、彼に貫かんばかりの衝撃を与えた。身体が数メートルも吹っ飛ぶ。

この決闘世界では、ライフダメージがそのまま精神ダメージ…この世界は精神世界なので、物理的に見える…となる。どのくらい精神ダメージに変換されるかは彼が調節できると彼の知識が訴えていたが、デュエルの始まった後では調節できない。

彼LP4000 - 3900 = 100

「はっはあ！！エアベルンの効果発動！手札を捨てさせて貰おう！  
」

ツメがさらに彼の手元へと伸びる。……しかし、



(…お前は!!)

彼の引いたカードは…

「行くぞ。これが、ラストターンだ」

「はっはあ!!きやがれ!!」

「墓地の『レベル・ステイラー』の効果発動!!さらにリバー  
カード、『あまのじゃくの呪い』!」

あまのじゃくの呪い 通常罠

このターン、攻撃力・守備力のアップ・ダウンは、それぞれ逆にな  
る。

レベル・ステイラー 罠 1 昆虫族

自分フィールド上のレベル5以上のモンスター一体のレベルを一つ  
下げ、墓地から特殊召喚できる。このカードはアドバンス召喚のた  
め以外にはリリースできない。

「はっは、上級モンスターか!!イイネエ!!」

「…行くぞ。二体のモンスターをリリース!!…現れる、「ライトマン  
・タークネスドラゴン闇の竜!!…!」

天が裂け、二色に身体を染めた竜が現れる。咆哮。彼は、その叫び  
を幾とどなく聞いた事が――

「……………そうか。お前が、俺のエースカード…」

彼は竜から目を離し、男を見た。

「…つかむぞ。勝利を。」

男は、動揺していた。彼のエアベルンはATK3900。対して少年の召喚したカードはATK2800。攻撃力が圧倒的に足りない。なのに、なんで彼はあんなに柔らかい笑みを浮かべているのだろう。なんで、この状況から絶対に勝てるかと確信している目をしているのだろう。

なんで…？

「バトルフェイズ！！『光と闇の竜』で『X-セイバー エアベルン』を攻撃！！“シャイニング・ブレス”！！」

竜のアギトから真っ白な光線が放たれる。

そして男は、その竜の能力を知らない。

「つく！墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果が発動！！」  
しかし、

「ムダだ…」

竜の頭部から雷が発せられ、ゆるやかなカーブを描いて男のデュエルディスクの…墓地に落ちる。

「なっ…一体、何が…」

光と闇の竜 光 8 ドラゴン族 ATK2800 DEF2400

このカードは特殊召喚できない。闇属性としても扱う。モンスター効果・魔法・罫の効果は無効にする。この効果を使う度に、攻守は500ずつ下がる。破壊され墓地に送られた時、墓地のモンスター一体を選択する。自分フィールド上のカードを全て破壊し、選択したモンスターを特殊召喚する。

効果を確認した男は驚いた。

「攻撃力が下がるはずじゃなかったのか…！？」  
攻撃力が3300となっている。

「『あまのじゃくの呪い』の効果だ」

彼は答えた。

「エンドフェイズまで、攻守のアップダウンは逆に作用するんだ」  
「となると、その伏せカードは……」

「ああ。もうちよっとATKを上げさせてもらっせ。

リバースカードオープン！』『王宮の弾圧』『マインドクラッシュ』  
「！！」

竜の雷が、二枚の罨を貫いた。

そして――

ATK3300+500+500=4300

――エアベルンのATKを、超えた。

「じ、の。……野郎おおおおお！！」

竜の光弾が哀れな獣を吹き飛ばす。

男LP4000-400=3600

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ。」

『あまのじゃくの呪い』まエンドフェイズまでのため、『光と闇の  
竜』のATKは元々のATKから、上昇した分…1500ポイント、  
下がる。

光と闇の竜ATK2800-1500=1300

男A 手札0

LP3600

彼 手札0 光と闇の竜(攻)

伏せ1

LP100

「くっそっ…！俺のターン…！」

ライフでは彼が大幅に勝っているが、このままではまずい。そんな状況で、男が引いたのは。

(『BF - 疾風のゲイル』…！おっしやあ…！)

「俺はこのモンスターを召喚するぜ…！」

BF - 疾風のゲイル 闇 3 鳥獣族 ATK1300 DEF  
400

自分のフィールドに同名カード以外のBFと名のついたモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚できる。1ターンに1度、相手モンスター一体の攻守を半分にできる。

「俺はゲイルの効果を使う！」

だが、『光の闇の竜』の効果で無効化される。

光と闇の竜 ATK1300 - 500 = 800

「だが、これで俺の勝ちだ…！ゲイルで攻撃…！  
今度こそ。」

そう、今度こそだった。

なのに。

「リバーズカードオープン…！『聖水の弊害』！」

竜の雷がそのカードを襲うが、

無効化は、されなかった。『光と闇の竜』のDEFが500未満の

ためだ。

聖水の弊害 速攻魔法

モンスター一体の攻守をもとの数値に戻す。装備カードを装備している場合は破壊する。

「ば…ばかな…」

男は思わず後ずさる。その足もとに、返り討ちにあい、丸焦げになった鳥が転がる。

光と闇の竜 ATK 800 2800

男 ALP 3600 - 1500 || 2100

「そ、そういえば、スキルアウトの連中が言ってた…『光と闇の竜』を使う能力者…まさか、コイツが」

「遺言は、それだけか」

男を睨む悪魔は、数分前とは比べ物にならない位邪悪な笑みを浮かべて、

「死ね」

白井黒子はその光景に、絶句した。

左右をビルに挟まれた道路。そこまでなら理解できる。

しかし、

炎をあげて燃えるワゴン車。

倒れた二人の男と、それを見下す…さっき知り合った少年。

そして…その上に浮かぶ、二色の竜。

「何が…起こってますの…!?!」

一応立ち入り禁止のテープは貼っておいたが、周りが気付くのも時間の問題だろう。

それにあの少年のレベルは1だったはずだ。クルマを爆破できるほどのレベル1なんて聞いた事がない。

だとすると――

「あの竜が原因ですの…?」

すると、

唐突に、竜がこつちを向いた。

「ッ!!」

竜が光線を放つと同時に、白井は空間移動した。レポートさっきまでとは反対側に降り立つ。自分の居たところが爆ぜ、地面がえぐれる。

「これは…後で説明してもらおう必要がありますわね。とりあえずそのひつたくり犯を回収しな」

その時、彼女の後ろから足音が聞こえた。立ち入り禁止のテープを貼っていたにもかかわらず、だ。

一般人のものだろう、その迷いのない足音を聞き、白井は焦って振り返る。

「いけませんわ!ここは危険で…:…あら」

その主は、彼女の良く知る人物だった。

彼は、高揚していた。自分の力に酔いしれていた。もし能力者の精神に詳しい者がいたなら、一目で暴走だと判断しそうだったが、そんな事はどうでもいい。

この竜は素晴らしい。その力を使えば、なんでもできる気がする。瞬間移動する少女が現れたが、彼の敵ではない。竜にかかれば、一瞬で灰にできるだろう。

さらに足音が響いた。そこには、もう一人の少女。

彼は、そのまま二人とも吹き飛ばしてやろうと思っ

竜の右翼に、風穴が空いた。

「……あ？」

一瞬にも満たない後、左の翼も吹き飛んだ。宙を舞っていた竜が地へと落ちる。

彼はゆっくりと首をまわして、見た。

「とりあえず飛んで逃げられちゃ厄介だからね」

右手を構え、体中からバチバチと電気を飛ばす、その人物を。

彼の知識が訴えていた。あれは、

230万人の、頂点。

学園都市でも七人しかいない、

最強の能力者——超能力者（レベル5）。

その少女は涼しげに、

「なんか騒ぎが起こってるから来てみれば、まさか竜とはね」

一枚のコインを弾きあげて、

「詳しい事情は分かんないけど」

そのコインが、右手に降り立った瞬間。

「とりあえず吹き飛ばされとけ」

オレンジ色の閃光——超電磁砲。

音速の三倍で撃ちだされたそれは、断末魔も許さず、  
竜を、打ち砕いた。

### 第三話 超電磁砲（レールガン）（後書き）

三つ、謝らなくてはならない事があります。

一つは今回出てきた罫カード『あまのじゃくの呪い』の、『光と闇の竜』だけの特別な裁定についてです。

どうも、『光と闇の竜』がフィールドに存在する場合のみ、『あまのじゃくの呪い』は1度しか効果を適用できない様なのです。これを知ったのは話の大半を書き終わった直後であり、もうデュエル構成をやり直せない所だったので、そのまま使わせました。しかも作者はこのコンボを気に入ってしまったので、また出てくるかもしれません。すみません。

二つ目は、漫画版で使われているとはいえ、非OCGカードを使用してしまった事です。『聖水の弊害』がそうです。また、これらも作者はたびたび出していいこうと考えています。作者の不足しがちなデュエル構成力では、OCGだけで構成するのは難しいのです。そのあたりを理解しつつ、こんな作者を優しく応援して頂ければと思います。

三つめは、第二話を何度か編集しなおしてしまった事です。連絡もせずに、すみません。

以上です。どうかこれからも本作をよろしく願います。

## 第四話 旅立ち（前書き）

今回で第一章終結です。

## 第四話 旅立ち

窓から吹き込む風の涼しさに、彼は目を覚ました。

「…あ…？」

あの時と同じだ、と彼は思った。倒れた自分が寝かされている。違うのは、彼の顔を覗き込んでいるのは少女ではなくて、カエルに顔が似た白衣の男くらいだ

「え？ええ！？」

彼は飛び上がった。同時に、脇腹に鈍い痛みが走った。微妙に麻酔が聞いているのだろうか。周りを見回す。どうやら病院の、しかも個室のようだ。

「おや、やっと起きたかい。なんとも麻酔の効きやすい患者だね」  
白衣の男は、痛みに顔をしかめる彼を無視して勝手にしゃべり始めた。

「なにせ三日も眠り続けてたんだからね  
え？」

「…み、三日？」

彼が恐る恐る尋ねると、カエル医者は頷いて、

「まあ、目を覚ましたなら問題ないさ。さて、ボクの出番はここま  
でかな。面接希望者が押し掛けてるんだ。良かったね、女の子ばかりだよ？」

「…別に、女に興味はない」

「おや、そっちの趣味かい？」

「違う！！」

彼が顔を真っ赤にして怒鳴ると、カエル医者は、

「ま、卸すならまたここに来てくれよ？説教つきで治してあげるからね」

二回目の真つ赤と怒鳴り声を背に、カエル医者は病室をあとにした。

しばらくした後、白井黒子と御坂美琴がやってきた。

どうも見覚えがあると思つたら、御坂こそが超電磁砲その人らしい。  
何を言われるかと思いきや、

「本つつ当に、ごめん!!」

いきなり頭を下げられた。

「え？」

「今回、ろくに状況確認もせずに超電磁砲をぶつ放つた事について  
ですの」

まるで側近のように隣にくつつく白井が補足をする。

「…ああ、それが。それならチカラに浮かれちまつた俺も悪いし、  
おあいこ…って事でいいぞ」

彼は生憎オナノコに謝られて興奮する趣味はないので、気まずそうに返す。すると、

「あ、そう？」

御坂はコロツと態度を変えて、

「ところでアンタの能力って何？竜出すとかメルヘンな能力よね」

「……お姉さま。今回の件で学園都市に 円もの損害を出した  
事とか、この方に超電磁砲の余波で全治三日の怪我を負わせた事と  
かはスルーですか？」

「うっ」

白井に突っ込まれた。

彼としたら損害の額のゼロの多さに慄いたり、この怪我は自分の能力の暴走のせいじゃなくてお前のせいかよと突っ込んだりしたかったが、二人ともさっさと帰ってしまった。

二人と入れ替わるように、初春がやって来た。

初春は彼を一目見ると、見まい品であるうりんごの入ったバスケットを落とした。

「あ、……よかったあ……」涙ぐむ初春。

それを見て、彼は小さな痛みを感じた。脇腹の痛みとは違う、胸の痛みだ。

「今日退院できるそうですよ。良かったです」

彼女はベッド脇の椅子に座り、りんごを剥き始める。

「でも俺には、帰るところがない」

「また私の寮に來ればいいですよ」

「迷惑になる」

「迷惑じゃありません」

「……」

まさか、即答されるとは思ってもみなかった。

「俺が暴走した結果、どうなったか知ってるんだろ？ だったら」

「迷惑じゃありません」

「またもや、即答。」

「……」

「……」

二人の間に沈黙が降りる。だが彼は、そんな沈黙が心地よかった。それが信頼によるものだと分かったからだ。

「……」

彼は、その信頼というものを心から大事にしようと思

その晩、姿を消した。

「先生……」

「彼は、さつき出て行ったよ」

初春の問いに、カエル医者さらつと返す。患者が望んで、医師である自分が退院許可をだしたのだから、彼が彼を引き留める理由はどこにもない。

「じゃあ、何か言ってませんでしたか！？何か……」

「『俺はアイツを危険にさらしたくない。だから、もうアイツの所に戻る気はない。これは俺一人の問題だ』だそうだ」

「……迷惑なんかじゃないって、言ったのに……」

「それと……『……また、どこかで会おう』だとき。まあ、ここで会う事のないように祈ろうかね。何度も入院なんて困るだろうし」  
初春は俯いて、

「……そうですね。また、会えますよね。どこかで……」

当の彼といえ、とりあえず自分の記憶でも探そうかと思っていたものの、手掛かりが全くない事に落胆していた。

「あるといえ、こいつだけだしな……」

デッキケースを開けて、『光と闇の竜』を取り出す。だが、このカードは彼の暴走に手を貸した可能性がある。完全に信用するには至らないだろう。

今は午前中。昨晩はネットカフェで明かした。

「……そういえば、まだ朝飯喰ってなかったな……」  
なにげなく近くのアミレスに足を向けた彼の後ろで、ドサ、と音がした。

「？」

振り返るとそこには、

「……………おなか、へった」

銀髪のシスターさんが、倒れていた。

## 第四話 旅立ち（後書き）

今回は魔術サイド…かと思いきや科学サイドです。

アクセス数は順調に伸びているのですが、感想欲に飢えています。  
バンバンお願いします。

## 第五話 幻想殺し（イマジンプレイカー）（前書き）

能力を暴発させ、初春の近くにいると彼女まで危険にさらしてしまう  
うと思つた主人公は、初春の元を去る。

翌日、彼が出会つたのは………シスターさんだった。

## 第五話 幻想殺し（イマジンプレイカー）

「……………は？」

彼は茫然と、倒れた人物を見つめた。年は十四、五くらいだろうか。その割には幼い声をしている。

「……………だから、おなかへった」

倒れたシスターさんはもう一度彼に言う。さてさて、これでもう逃げられなくなりました。どうしませうか。

「……………それで俺にどうしろと？」

「……………おなかへった」

「お前はおなかへったしか言えないのか？」

「お前じゃないもん！インデックスだもん！」

「あ…？イン……なんだって？」

「インデックスだよ！！ついでに言う魔法名は『Dedicate Us 545』（献身的な子羊は強者の知識を守る）だよ！」

彼はますます訳が分からない。

インデックスというのは何らかの能力名だとしても、魔法名とは何なのだろうか。この少女は変なアニメにでもハマっているのだろうか。

とりあえず、

「インデックスとやら。さらばだ」

と、華麗なスルーを決め込む彼だったが、

「やだやだやだ〜っ！！！！ごはん食べたいいいいいいっ！！！！」

バツタリ倒れた姿勢のまま、シスター・インデックスはバタバタ手足を暴れさせ、絶叫。

「あーもう分かった！！分かったから黙ってついてこい！！」

仕方がないので、近くのファミレスに行く事にした。財布には樋口さんがおひとり入っていたので、問題ないだろう。

結果、大問題だった。

「えーっと、『特製ステーキセット』と、『イカ墨スパゲッティ』、それと『オムレツ』に、『ライス大盛り』、あと……」

啞然とする店員、と彼。

とりあえずドリンクバーを頼んだ彼と対照的に、インデックスはドンドン注文を増やしていく。

「なあ、もしもだ、もしもまだ頼むつもりならさ、今頼んだ分喰い終わってからにしろよ」

インデックスが注文したものの総額を数えると、財布の樋口が悲鳴を上げる。これは……まずい。

というか、彼女は全部食べきれのだろうか。

「……ちよつと金おろしてくる。ここから動くなよ。請求されるかならな」

「分かったよ！」

と言いつつインデックスは出てきた料理にかじりついている。

彼は溜息をつき、店を出た。

学園都市の学生の口座には、定期的にお金が振り込まれる。『時間割り（カリキュラム）』という名前の、いわゆる脳イジリの代金なのだろうか。基本的には能力レベルの高い方がたくさん振り込まれるのだが、レベル1の彼の口座には破格の数字が記載されていた。

俺は学校通ってないのに、こんなに貰っていいんだろっか、と思っ  
てしまう。

忘れがちであるが、彼は記憶喪失である。思い出は綺麗さっぱりな  
くなってしまっているが、知識は常識レベルくらいはあるのである。  
それゆえに、ATMの使い方は心得ているのにお金を引き出した事  
がない、などという不思議な状態になるのである。

「まあ、諭吉さんの出番かな」

数万を引き出し、コンビニを出す。すると、

「あのねえ。お金貰ってるし、僕は君をあそこまで連れてっていか  
なきゃなんないんだけどねえ」

「やだやだーっ！！ミサカは遊園地に行くんだもん！！ってミサ  
カはミサカは駄々をこねてみる！」

道端に停まってるタクシーから、そんな声が聞こえてきた。なんだ  
ろう。体を光の速さで駆け巡った凄く嫌な予感。

「あー！その人、ミサカの意見が正しい事を証明して、ってミサ  
カはミサカは頼み込んでみたり」

ちくせうスルーしようと思ったのになんだよ今日の俺はついてねえ  
よ、とか心の中で叫んだ彼だったが、

「ああ、俺急いでるから」

にっこり0円スマイルで足早に去る。と同時に、

「嘘だ〜！！さっきこのコンビニでエッチな雑誌立ち読んでたくせ  
に、ってミサカはミサカは——ごぶっ」

「大声であられもない事言うなバカ！！」

光の速さでタクシーまで戻り、声の主である少女の口をふさぐ。初  
対面の純情シャイボーイになんて事を言うのだろうか。親の顔が見  
てみたい。

「……で、何をもめてたんですか？」

少女の口を押さえたまま、運転手に話しかける。

「この子がいきなり遊園地に行きたいと言い出してね、困ってたん  
だよ。保護者さんからお金も預かってるし、場所も伝えられてるの

にさ」

「さようならお元気で」

ただのわがままかよ。彼は再び早々に立ち去ろうとするが、

「待って！ミサカを遊園地に連れてって、ってミサカはミサカは、

『人妻特集』とか『JKの……』とかいうタイトルの雑誌をニヤニヤ立ち読んでたあなたに——ごふっ」

「だからいい加減にしろ！！」

平日なので人通りは少ないが、道を行く人々の冷たい視線が超気になる。

『あの人、人妻趣味に加えて幼女趣味もあるの……！？』

なんて声が聞こえてきそうだ。

「……つまりはこの子がお釣りを貰って、俺が遊園地に連れていく（かのように見せかけて家まで送る）

って事でおkじゃないですか？」

「おや、いいのかね？」

運転手はそう言うが、今の彼はやる事も帰るところもないので、別に負担にもならないのであった。

で、<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めと名乗った少女と一緒に、インデックスを待たせてるファミレスまで来た訳であるが。

「わーっ、大食い大会みたい、ってミサカはミサカは感嘆してみる」

……料理の数が、増えていた。

もはやテーブルを埋めつくすほどのそれらは、彼にとって悪夢にか見えなかった。

「ねえねえ、ミサカも頼んでいい？ってミサカはミサカは聞いてみる」

「ああ、別にいいぞ」  
そして、大事な事を、インデックスの時にも言えば良かった事を、言う。

「でも、千円までな」

打ち止めの頼んだ料理を含めると、財布の諭吉が全員吹き飛んだ。  
またコンビ二へ出かけるのも面倒なので、彼の昼食はどうやらお預けになりそうだ。

「で、インデックス、お前はどうすんだ？」

打ち止めはあとで送るにしろ、彼女の家はどこなのだろうか。ついでに送ってやるか、と彼は溜息をつきつつ思う。

「確か、第七学区の 寮だったよ」  
第七学区。

電車を使わずに行くのは少々時間がかかるが、彼の手元に電車賃など残ってるはずがない。

「歩くぞ」

「「ええっ!?!」」

「文句言つな!金がないんだよ!」  
半泣きになりながら、彼は歩き出した。

「ぜえ…ほら、着いたぞ」

「おお、ホントに着いた、ってミサカはミサカは今までのミサカ達の苦勞を一言で表してみたり」

「ていうか、疲れたんだよ……」

三人は、インデックスの言った察まで辿り着いていた。すでに日は傾き、下校時刻間近なので、帰途につく学生もたくさん見かける。ちなみに打ち止めとインデックスの手には、ペットボトルのスポーツドリンクが握られている。熱中症防止のために買ってやったのだ。自分の分はない。誰かさんが『イカ墨スパゲッティ』に変えてしまったためだ。

「おし、じゃあインデックス、元気だな……」

「うん！ーありがと！ー…そういえば名前、聞いてないね」

「ああ、実はな、俺は……」

の瞬間、インデックスの輪郭がぼやけた。

（あれ…？…：…そういえば、朝から何も食べてない上に、この暑さの中を延々歩いてたんだっけ）  
と思う間もなく、彼は倒れた。

「……はっ！ー！」

彼はうつすらと瞼を開ける。どうやら部屋に敷いた布団に寝かされているようだ。……何だろう、すごいデジャヴ。

しかも一回目と違うのは、彼の顔を覗き込んでいるのが少女ではなくて、ツンツンに髪の毛をとがらせた少年という事だけで…。

「またこんなのかよおおおおおおおおおおおっ！ー！ー！」

「うおおおっ！？」

彼の絶叫に、少年はビクウ！ーとのけぞる。その後、

「……目を覚ましたのはいいけど、もうちょい静かにしてくれませんでせうか？この前なんか隣人土御門が『地球より大事な妹との団らんを邪魔すんなやー！ーっ！ー！ー！』て乗り込んできたんだよ」

と、付け加える。

「ああ、悪い」

と彼も謝って、

「それで、一体ここはどこなんでせうか？」

口調を真似てみる。

「ん？ああ、俺の寮。アンタが倒れてたから、運んできたんだよ」

「打ち止めは……？」

「あの子は、ほら」

少年が指で指し示すと、

『このクソガキイイイイツー！！いつまでほつつき歩いてんだア

アアアアアアアア！！』

「ひえ〜ん、ごめんなさいいっ！……ってミサカはミサカは激怒するあなたをなだめるためにとりあえず謝ってみたり。でも優しいそんな人達にタダ飯を頂いているので明日の午前中くらいまでは厄介になりま〜す、ってミサカはミサカはさようなら〜」

『このクソガキイイイイ！！』ブツツ

保護者らしき人物と電話している打ち止めがいた。やけに口の悪い保護者だったが、あれは本当に保護者なのだろうか。

後ろの、彼が布団で寝ていたためにマットレス状態になっているベッドに、インデックスはすやすや眠っていた。話を聞くと、彼女は夕飯も超食べたらしい。「昼飯おごって貰ったんだってな。悪かったな、色々と」犠牲になった諭吉に黙とう。

ついでに少年の名前は、上条当麻かみじょうとつまというらしい。

風紀委員第一七七支部で、初春飾利は一人、あくびをかみ殺した。今は、風紀委員の残業をしている。決して、自身を忙しくさせる事

で彼の事を忘れようとしているわけではない。

(…………あと二、三割くらいかあ。)

息抜きとして、彼女の友人である佐天涙子さてななみこも愛用している都市伝説WEBサイト(科学が発展すると、逆に非科学的な事に興味がいくのだ)を、残りの仕事を片づけるために閉じようとした時、見つけた。

『スキルアウトのダチから聞いたんだけどさ、レベル1…レベル0だったかな?のくせに大能力者(レベル4)をぶつつぶした野郎がいるんだってよ。やべえよな』

『マジかWWWすげえな、どんな奴?』

『なんか、金髪碧眼で欧米系?だったかな。能力が特殊らしくてな?しかもぶつつぶした理由が、「任務」がどうたらで謎らしかったんだよ……………』

心臓が止まるかと思った。

なぜなら初春は、そのような人物と面識があり————。

「…………俺、実は記憶喪失でさ。自分の名前の分からないんだ。で、今自分の事の手掛かりがどこかにないかな?なんて感じで」

「いわゆる自分探しの旅なんだね、ってミサカはミサカは薄い胸を張って偉そうにしてみたり」

上条当麻も記憶喪失である。知らない辛さは、痛いほどよく分かる。だから、積極的に彼の手助けがしたいと思い、

「でもさ、見た目的に留学生なんじゃないか?だってお前、

欧米っぽい外見してるじゃんか」

だよなあ、明日からその線であたってみるか、とつぶやく彼。  
窓の外は、真夏と言えども真つ暗だ。行くあてのない彼ともとも  
と泊まる気全開の打ち止めは、今夜は泊めてやる事にした。

夜は、更けていく。

第五話 幻想殺し（イマジンプレイカー）（後書き）

とうとう春休みが終わり、夏休みに恋焦がれているこのごろです。  
今後は、さらに不定期な更新となると思います。

あと超感想が超欲しいです。

## 第六話 武装集団（スキルアウト）（前書き）

やっと第六話です。

前書きと後書きにはこういつ文を載せよう、と執筆時に考えているのですが、いざ書き終わると、時間がたち過ぎてそこから入んを忘れてしまっているのです。

## 第六話 武装集団（スキルアウト）

夜が明けた。

彼は寝ころんだ姿勢のまま、周りを見渡した。布団を定位置に戻したベッドでは、打ち止めとインデックスが仲よさそうに眠っている。フローリングに寝ている彼は、自然とそのベッドを見上げる格好になり、

寝相が悪いのか、やたら着衣の乱れた二人が目に入った。

「……は？……ちよつ……!!」

慌てて起き上がる彼。幸いにも、二人はまだ起きていない。

「そういえば、上条は……？」

ツンツン頭を探すと、……果たして彼はユニットバスの中で丸くなっていた。

「……何やってんだ……」

もう彼はツッコミキャラ安定かもしれない。

「……ん？」

上条はがばっ!!と起きて、

「つていけね、もう土曜の8時半!?!いかん、今日は10時から卵のタイムセールなんだ!?!早く朝食作らねえと!?!」

朝からハイテンション。見事です。

「朝食、ね……」

彼はふと、考えて、

「なあ、いくつか料理教えて貰っていいか？」

それを聞いた上条は、

「いいぞ!!上条さん直伝の卵料理を見るがいい!!」

タイムセール的事など忘れてしまった。

「ちくしょおおおおおおおつ！！不幸だあああああああああああああつ！！！！」

上条はガツガツと、涙を流しながら居候（飯）と作ったやたらボリユーム満点の朝食を喰らっていた。熱心に教えていたため、タイムセールの時間が着々と近づきつつある。

「…なんか、悪いな上条。荷物持ちとして付いてくよ、買い物」

「ミサカも行く〜ってミサカはミサカは好奇心旺盛！」

「私に行かないよ！！今日は超機動少女カナミンの日だもん！！」

「…かくして、インデックスに留守番を頼み、三人は修羅場タイムセールへ向かった。」

「開始から30分も経ってるのに、まだ残ってた…だと…」  
上条が嬉しい悲鳴を上げる。卵は人気商品らしい。

「しかもおひとりさまひとパックまでだから三パックも買えるね、つてミサカはミサカは大はしゃぎ〜」

「よし皆の者、今日の昼飯はチャーハンだあつ！！」

「いよっしやあああつ！！」

三人で勝利の雄叫び。主婦の皆さんの目が痛い気にならない気にならない。

しかし、その程度の幸運なら余裕で打ち消す右手を、誰かさんが持っていて。

「や、やめてください!!」

「へへっ、いいじゃんかお嬢ちゃん、ちよつとくらい」

「は…放して!」

路地裏のその光景を見た時、三人は呆れた。道を行く人々が見て見ぬふりして去っていくのだ。少女に絡んだ不良っぽい輩は二人。うち一人は刃渡り20センチほどのナイフを持っているのが見える。とりあえず、

「おい、嫌がつてるだろ!!そいつから離れる!!」

上条は一步踏み出すと、

「ああん?何だお前」

「どうした、リュウ?」

「コイツウケるwww正義のヒーロー気取りかよwww」

奥からもう三人、輩が出てくるのを見て「うげっ」とうめいた。

上条はなかなかの腕力を持っているが、1対5ともなると、かなりのワンサイドゲームになる事必死だ。

しかし、ここで引いたら男ではない。男・上条はさらに一步踏み出す。が。

「のんきに歩いてくるんじゃねえぞオラア!!」

「うごっ…」

二人がかりで殴りかかれ、地面にうづくまる。そこに執拗な蹴りが入った。

「っ…打ち止めを連れて逃げろ!!」

上条はせめてあとの二人だけでもと、後ろを振り返った時。

そこには、オロオロと困惑する打ち止めしかいなかった。

「え…?」

「昼飯はチャーハンなんだろ?このままだと昼に帰れないぞ」

その声は、上条の頭上から聞こえた。ゴツ…という音とともに、チンピラ的な輩の一人が倒れる。

「どうやら記憶を失う前の俺は、多少ケン力強かったのかね」

彼は拳を振り切ったまま苦笑していた。

「危険な時にばかり自分の手掛かりが見つかるようになってるのかもな」

「なにを一人でブツブツ言ってるんだオラア!!」

「!おっと」

彼はかるやかにチンピラを投げた。

「……は?うごっ!」

チンピラはそのまま、顔を踏みつぶされて気絶する。ケン力慣れしている上条でさえ、息をのむほどあっけなかった。

「あ、危ない!!」

絡まれていた少女が叫ぶ。振り向くと、最後のチンピラがナイフを構えていた。

「すましてんじゃねえぞオ!!」

ナイフが振りおろされる前に、彼の膝蹴りが顔面直撃。見事です。

「……お前、強いな」

「どちらかというと、記憶を失う前の俺が、かな。自然に身体が動いたんだ」

要訳：自然に身体が動いちゃうんだ

とりあえず一息ついた一行だが、

「おいリュウ、どうし…なっ!!おい、リュウたちがやられてるぞ

!!」

「……………なんだと?」

路地裏奥から聞こえてくる見事なまでのハモリ。流石にあの数を手にする気はないので(なぜか負ける気だけはしなかった)彼は、

「上条ツ!!打ち止めツ!!その人!!駆け足よーい!!ド

ン!!」

号令を掛けたが、

「え？あの、いきなり言われても……」

約一名、絡まれてた少女だけはこのノリについていけないようだった。

「いいから！！逃げるんだ！」

上条が少女の手を引っ張るが、

「逃がさねえぞー！！」

新手の一人が迫る。こいつの相手をしていたら、恐らく追いつかれてしまうだろう。だが、

「ミサカを忘れて貰っちゃ困るんだよね、ってミサカはミサカはビリビリしてみたり」

彼の腕に抱えられていた打ち止めの額から、電撃がほとばしった。どことなく間抜けな音とともに、男が倒れる。

「……お前、能力者だったのか」

彼が意外そうに聞く。平日にうるうるしていたあたり、『カリキュラム時間割』を受けていなさそうに見えるが……

「いろいろ事情があるの、ってミサカはミサカは話すと長くなる話をしてもいい？」

「……悪い、後にしてくれ」

彼は心からそう思った。

「いろいろとありがとうございました！」

なんとか逃げ切ったあと、佐天なつてん涙子と名乗った少女は、深々と頭を下げた。

「気にすんな、俺が勝手にやったんだ」

上条が本当に善意から出た言葉を言った。こいつ、自覚はなさそうだけど相当数の女をたらしこんでるな……と、彼の直感がそう告げる。「それにしても、スキルアウト、か……」

「あのナリだとそれっぽいね、ってミサカはミサカはあなたの意見

を肯定してみる」  
スキルアウト。

学園都市から『できそこない』の烙印——レベル0認定をされ、非  
行に走る若者たち……だったか。

その存在が、どうも彼の頭の隅に引っかかるのだ。いつだったか、  
知識ではなく、聞いた事があるような……

『そ、そういえば、スキルアウトの連中が言ってた……『光と闇の竜  
を使う能力者……まさか、コイツが』

そうだった。

彼が数日前、デュエルをして意識不明（多分）にしてしまった男。  
ソイツが最後（最期ではないと信じたい）に呟いた、あの言葉だ。  
もしかしたら、記憶をなくす前の彼は、スキルアウトと関係してい  
て、彼らから何かしらの情報を得られるかもしれない。  
そうだったなら、彼が取る選択はひとつだ。

「悪い、上条。世話になったな。打ち止めも頼む。俺の分までチャ  
ーハン、食っていいぞ」

それを聞いた上条は何も聞かずに、

「……おう、またな。」

と、手を振って、その手に提げたマイバッグの中で卵がry

「不幸だあああああああああ！！！！」

「……ん？」

苦笑しながら上条を見ていると、さっき助けた少女がじつと彼を見つめていた。

「……俺の顔に何かついてるか？」

「あーいや、欧米系の人ってここじゃ珍しいですから……レベル4を倒したっていう都市伝説の能力者……まさかこの人が……？」

後半は聞き取れなかったが、とりあえず気になった、どうでもいい事を聞いてみる。

「……なあ、初春ってヤツ、知ってるか？」

「え？初春、ですか？」

「いや、悪い。なんでもない」

少女が答える前に遮って、振り返り、歩き出す。一体自分は何を訊いているんだろう。少し恥ずかしくなった。

「じゃあな。何かの縁があれば、また会おうぜ」

彼は心の中で彼らに言った。どうやら彼は腕っ節は強そうだし、このままスキルアウトの皆さんに俺を知ってませんかと言聞いて、それから今後の事を考える事にしよう。

そして、彼は表の世界から去った。



第六話 武装集団（スキルアウト）（後書き）

自分で自分の駄文を読んで一言。

「おい、デュエルしろよ。」

どうも決闘サイドはあまり出せないようです（わらびの脳内的に）。  
次も科学サイドかと。そして今のところ全然出番のない佐天さんと  
一方さんは日の目を見られるのか。そしていきなり来るニコニコの  
時報。これはビビる…汗

第七話 冷たい悪魔（前書き）

学校が始まるとなかなか時間が採れませんね。

## 第七話 冷たい悪魔

所変わって、風紀委員一七七支部。

初春飾利は、突然スカートをめくられた。

「…ひああっ！！さ、佐天さん！！だからスカートめくりはやめて  
つて言っただじゃないですか！！」

「いやーごめんごめん、もはやもうクセになっちゃってさあ」

スカートめくりの確信犯、佐天涙子は全く申し訳なさそうにせずに、

「あ、そうだ初春！私すごい人と会ったんだよ！金髪の人で、めち  
やめちやケンカ強い人！」

それを聞いた初春は、真っ赤な顔を真面目にして、

「え……金髪？」

「そ。いやー『あなた都市伝説の方ですか？』って聞くのもアレか  
なーと思っただけど、やっぱり聞いた方が良かったなあー」

「佐天さん……その人、どこで会ったんですか？」

「え？」

「……ここか。」

彼は廃墟の前で立ち止まった。モロにアレな服装の若者が数人、こ  
ちらを見ているのが分かる。昼間なのにどことなく薄暗いのは、こ  
こが非合法な場所であるからか。

…彼が倒れていたという初春の寮は第七学区。という事は彼がスキルアウトと関わっていた場合、一番近いグループである第七学区のグループである可能性が高い。

「さて……行くか」

彼は歩き出した。

突然、御坂美琴の携帯電話が鳴った。自室で某カエルストラップを愛でていたのだが、一応相手を確認。白井黒子だったらこの際無視でもいいかと思っただが、別の人だった。

表示されていたのは、友人、佐天涙子の名前。

「がはっ！！」

スキルアウトの下っ端である男は背中から地面に倒れこんだ。直後、まるで鉄パイプを仕込んであるかのような肘鉄を喰らい、気絶する。

「こんなもんか」

彼は溜息をついた。こいつらときたら、リーダーに会いたいとずっと言ってるのに、それを無視して殴りかかってくる。会話にならない会話とはこんなないらつুকのか、ともう一度溜息をつく。

すると、彼の足もとに火薬の匂いを伴った穴ができた。

「っ！！」

続けてパン、パンといった乾いた拍手のような音が立て続け響いた。「チツ、サイレンサー付きか。最初が当たらなかったのはラッキーだったな」

彼は物陰に隠れながら呟いた。視線を落とすと、小さな筒のような

物が転がっていた。

発煙筒だ、と分かった。ためらわずに奥へ投げる。

「なんだ！？煙…ごふっ」

「バカ早くそこを離れる！！うぐっ」

煙にまぎれ、彼は発砲した相手に接近、一秒にも満たない間に二人のスキルアウトは倒れていた。せつかくなので、拳銃と弾を十数発失敬する。

世間一般では、武装した十数人にほぼ素手で勝てる人間というのは、かなり異常であろう。しかし彼はそうは思わなかった。

それこそ彼の本当の姿だと、なんとなく分かっていたからだ。

「あん？」

彼が廃倉庫に入ると、奥にいた大柄な男が振り向いた。それに釣られるように、ほかのチンピラどもも振り向く。その数八人。どうやらリーダーと、その腰ぎんちゃくオンリーの領域のようだ。その中には見知った顔もあった。

「あ！てめえは…！！」

顔だけでも四つもばんそうこうを貼った男は、午前中に彼がぶん殴った男だ。そういえばここにきてから時計を見ていないが、今は何時くらいなのだろうか。多分、午後一時くらいだろう。

彼は今、冷静になっている。まるで氷のようなその精神は、少しだけ懐かしい。

「あんたがリーダーか？」

自分でも驚くほどの平坦な声で、奥の男に聞く。すると、

「知らねえよ、てめえみてえなやつ。覚えたくもねえ」

嫌そうな顔をして男は、

「でも他を当たれば誰か知ってるかもな。スキルアウトは割と顔が広いんだ」

彼は数ミリだけ眉を細めて、

「なんだそりゃ。出来の悪いRPGかよ」

「現実なんてそんなもんさ。まず俺は目の前の侵入者を叩き潰さなくちゃならねえ」

「奇遇だな。俺もそんな気分だ」

九対一の、ワンサイドゲームが始まった。

「……………まあ、こんなもんか」

彼は本日何度めになるか分からない溜息をついた。足もとには両腕の関節を外した男が転がっている。

「うっ…化け物め」

「化け物オ？」

彼は呆れたように、

「お前らが言ってた化け物ってのは、能力者の事じゃないのか。俺はまだ一度も能力を使っていないぞ」

その言葉に、男が目を見開く。

「バカな…能力を、使ってないだと？」

「実は状況的に使えない、という事なんだがな。いちおう俺も能力者だが、使うと倒すのに時間かかるし。その上相手次第だとデュエルに負ける事もあってな…」

「……………待て。デュエルだと？」

「？それがどうした」

彼は不思議そうに聞く。それが今、なぜか世界中で大流行している事は知っているが…………

「金髪の欧米系……デュエル……ま、まさかお前、都市伝説の……」  
「その都市伝説は、そんなに有名なのか」

彼は男の首筋に拳銃を押し当て、

「お前が俺を知らないなら、お前には俺を知っていそうなヤツを覚えてもらおう。そしてそいつが俺を知らなかったら、それを延々と繰り返す。そう決めたよ、今。……ちなみに同じヤツに聞く事がないように、一度聞いたヤツの身体のどこかをふっ飛ばしとくか。そうすれば二度手間は無いしな。どこがいい？片腕が分かりやすいが、両腕でも構わないぞ」

ひいつ、と男は小さく叫んだ。

ちよろいもんだ、と彼は心の中で鼻で笑った。武装しているとはいえ、所詮はただの学生だ。自分のように特別な訓練でも受けてない限り、こんな状況でビビらない事なんて

「……！！」

今、なんて？

特別な、訓練。

もしかして今、彼は……着々と記憶を取り戻しつつある？

しかし彼の思考はそこで止まった。

倉庫の奥のさらに奥で、大きな爆発音があったからだ。

「！なんだ……？」

彼の視線の先にあったものは

パワードスーツ

駆動鎧。

頭でつかちのその姿は、学園都市製の戦闘スーツだ。本来は警備員アンチスキルが身に付けているのだが……。

「かっぱらってきたか。その過程で何人殺した？」

「殺してなどいないさ？死んだ方がいい状態かもしれねえがな」

くぐもった声が聞こえた。恐らく男性のもので、駆動鎧の中から発しているのだろう。

「クソ野郎が……」

「怒ってるつもりか？決闘世界」

男は彼の能力名を呼んだ。彼が小さな笑みを作る。

「お前がリーダーか」

「そうだ」

「俺が倒したヤツらで全員じゃないな。まだ何割残ってる？」

「俺が指示を出せば、五分で百人は集まるさ」

「お前、俺を知ってるな？」

「忘れるものか。一度殺されかけたじゃないか」

「俺が？お前を？」

「お前は忘れたのか。薄情というか、氷みてえなヤツだな。まあ、

お前は「任務」とやらをやりすぎて俺みてえな小物は忘れたってか。

もつとも、今は水みてえに生ぬるいが」

まるで世間話でもするように重要な情報を得ていこうとする彼。

その様子を、駆動鎧の男はジッと見つめて、

「……本当に、生ぬるくなっちゃまったなあ、決闘世界。もしかして

お前、記憶喪失にでもなったのか？バカみてえなツラしやがって、

そんなバカにやられた俺ってのあ何なんだよっ！！」

男は急に駆動鎧の装備を使った。

鉄板でも撃ち抜く、特製サブマシンガン。

「っ！」

奇跡的に物陰に隠られた彼に、弾の衝撃が襲いかかる。コンテナというものは鉛玉が通用しなさそうだが、風や電撃を操る能力者を鎮圧するための装備に、そんな常識が通用するとは思えない。時間の問題だろう。

「冥土の土産だ。一つ教えてやる」

男は手を休めずに言った。

「俺達はこれからあのうざってえ風紀委員どもを潰しに行く。これはほとんどのスキルアウトが参加する。たとえ能力を使われたって、数で圧倒すれば問題ない」

それを聞いた時、頭の中が真っ白になる。

巻き込まないように、彼女のもとを去ったというのに。

バカみたいに群れるしか能のないバカどもに襲われるという最悪の形で、巻き込んでしまうのか。

「まずは第一七七支部、だったか？一番近いしな。そこから順番に襲っていく。警備員に邪魔されないように、準備はしてある。今こそ、俺達を見下す風紀委員を倒す時なんだ。……できればお前の参加してくれないか？レベル4を破った経験のあるお前なら、きつと

「ふざけんじゃ、ねえよ」

俺達を見下す？違う。お前なら、きつと？いい加減にしる。

「確かに、風紀委員にも落ちこぼれはいる。それは仕事がつまみできないヤツの事じゃねえ。自分のレベルが高いからって、無能力者を小馬鹿にしている奴らの事だ。そんなヤツらをお前らが嫌うのは仕方ねえ。誰だって好印象を持ってないだろうよ」

「俺の知ってる風紀委員は違う！自分の寮の目の前に倒れてた見知らぬ男を介抱してやるようなヤツだ！自分勝手な行動で大けがを負った、名前も知らない男のために、涙を流せるようなヤツなんだよ！あいつらのシアワセな日常をぶち壊すってんなら、俺はここでお前を止める！たとえお前をぶち殺して指名手配されても！あいつらを敵に回してでも！シアワセで楽しくて、いつも笑顔が絶えないなんていう、俺には一生手に入らない日常は、俺が守ってみせる！！」

そのためなら、いつでも闇に堕ちてやる。

その程度の覚悟なら、決まっていた。

今、決めたのかもしれない。

初春の寮で目を覚ました時かもしれない。

記憶を失った瞬間かもしれない。

それとも、自分が他人から奪ってきたものを、明確に実感してしま

った時かもしれない。

彼に、立ち上がる理由ができたのだから。  
例え命を張ってでも、守るものができたのだから。

「ああそうかよ」

男はくぐもった声で、容赦なく引き金を引いた。コンテナが粉々に砕け、隠れていた少年が現れる。

数万ボルトの電撃にも耐えるスーツに身を包んで、最新鋭の兵器を手にした絶対の相手を前に、しかし少年はもう隠れない。逃げもしない。

ただ、正面から向かい合う。

「あばよ」

ぶっきらぼうに、男が再び引き金を引く。

「うおおおおおおおおあああああああああああああああああああああ  
あああつ！！！！！！」

少年は、走りだす。戦略の何もない、計算など何もない。ただ、まっすぐ走っていく。

決闘世界起動まで、あと2秒。

起動範囲まで、あと8歩。

弾丸の速度は、それを遥かに超える。

しかし、弾丸はそれで、彼の足もとに突き刺さった。続いて間抜けな音の電撃が走り、サブマシンガンを撃ち落とした。一目見るだけで、もう使い物にならない事が分かる。

「間に合った、ってミサカはミサカは一息ついてみる」

倉庫の入り口にいたのは、ここに来るはずのない人物。

「こんな時に能力がないって不便だな。あ、おい、ケガ、ないか？」  
打ち止めと、上条当麻。

彼は彼らも巻き込みたくなかった。  
でも、彼らは自分から巻き込まれにきた。  
まるで、それが当たり前のように。

## 第七話 冷たい悪魔（後書き）

次回で第二章が終わります。まあ章自体は作者が区切りを付ける意味で勝手に呼んでるだけなんですけど。

あと、優しく評価ボタンをプッシュして頂けると、作者がフィードモードに突入します。

## 第八話 罪（前書き）

まだ第二章は終わりません…  
そんなg d g dで大丈夫か？

## 第八話 罪

彼は、何が起こったのかよく分からなかった。ただ、

廃倉庫の入り口に数時間前に別れたばかりの上条と打ち止めが立っていて、

なんらかの電気力がはたらき、自分に向かっていた弾丸が軌道を変えて、

男がその電撃でよろめいて、

そして。

「なんで来たんだ、とか思ってたんじゃないやねえだろうな。俺の勝手だこの野郎！」

彼が巻き込んでしまったにもかかわらず、大きな笑みを浮かべる不幸な高校生が叫んだ。

時は少しさかのぼる。

御坂美琴の携帯電話に電話を掛けてきたのは、佐天涙子ではなかった。

「あ、良かったつながった！御坂だよな！」

「！？んなななっ…！？」

その声は、いつもの高校生の声だった。思わず携帯を放り投げてしまい、机の角にぶつける。

「ぐがあ！？耳、ちょ、耳がああっ…！」

「あんたいきなりなんなのよ！？」

再び機体を掴み、怒鳴る。あまり騒ぐと口づるさい寮監に見つかる可能性があるが、そんな事はもう気にしない。

「……で、何か用？」

極めてそっけない感じで、美琴は言う。すると、

「御坂、お前白井と連絡が取れるか？」

「……え？」

予想外すぎる答えが返ってきた。美琴の表情が凍りつく。

「……私じゃなくて、あのバカに？」

「ああ、白井じゃないとダメなんだ！！頼む御坂、あいつの連絡先を教えてくれ！！！」

「……（つまりなんで佐天さんの携帯からアンタがかけてくるのかとか今どんな状況にいるのかとかそんな事どうでもいいから早く私の後輩と会いたいわって言うのねアンタは。ていうかなんであのバカなわけ？私じゃないのそこは私でしょどうなのよこんちくしょおおおお！！）」

「急いでくれ！！一刻も早く連絡を取らないとアイツが危ないんだ！！」

「……」

「早く会って話したいんだ！！いや、しなけりゃいけないんだ！！白井と！！」

「……」

「……っ、知らないわよバーカ！！！！！！」

「！待て御坂！実はだな、俺の知り合いが危険で——ブツッ」

美琴は勢いよく通話を切ると、携帯を放り投げてベッドに突っ伏し、憤怒のうめき声を出し始めた。

「まいったなあ。風紀委員ならこんな時の対処法とか知ってると思っただが……まさか連絡すら取れんとは……不幸だ」

「ごめんなさい。何故か白井さんの番号だけ登録してなくて……」  
「いや、いいんだ。十分だよ」

「むしろ取れても取れなくてもミサカ達のやる事は変わらないかも、  
ってミサカはミサカは優しい態度をとってみる」  
彼と別れてから十数分後。

上条、佐天、打ち止めの三人は話しあっていた。無論、一人で突っ  
走る彼をどう止めるかである。彼はなんでもない風を装っていたが、  
モロバレだった。勿論、向かったのがスキルアウトのたまり場とい  
うのも予想がつく。彼の強さならおおごとにはならないだろう、と  
いうのが三人の意見だった。ここは能力の跋扈する学園都市なので、  
数の差はあんまりアテにならないのだ。  
答えはすぐに出た。

「よし、俺がアイツを連れもどす！はいおしまい」

「ええ！？話し合いの意味は！？」

「じゃあミサカも行くーってミサカはミサカ」

「打ち止めは帰るんだ。危ないから」

「ミサカも連れていかないと、この人に      とか××されたって皆  
に言いふらす！！ってミサカはミサカ」

「分かったから！！静かに！」

上条どころか、佐天まで顔を真っ赤にする。

最近の子供は知識が豊富だなあ親はどんな人なんだろうな……ああ、  
昨日電話してた人か。と上条は熱い頭で考えた。

「ああもう仕方ねえ！！行くぞ打ち止め！！」

「レッツゴー！！ってミサカ」

「ええ！？二人で大丈夫なんですか！？」

佐天は心配そうに聞いたが、

「だって風紀委員と連絡とれなかったし、仕方ないだろ」

当たり前のように上条は返す。

「行かないと、一生後悔しそうなんだ、俺」

「今日はありがとうございました!!」

「ミサカも楽しかったよ、ってミサカはミサカは手を振ってみたり  
！」

「じゃあな！もう絡まれんじゃねえぞ！」

走り去って行く二人を、佐天は見送る。

そして、気付いた。

「…白井さんのはないけど、初春のなら登録してるじゃん、私……  
一応連絡取ってみるかあ」

そして、二人を見つめる影が、もう一つ。

「あのガキ……見つけたと思ったら何やってやがんだ……？」

そんな訳で上条ならびに打ち止めは廃倉庫までやってきたのだが、  
彼がそんな事を知ってるはずもない。

「見た限り、あの駆動鎧の男をやつつければいいんだな。よし打ち  
止め、お前はどこかに隠れてるんだ」

「駆動鎧本体にビリビリが効かなかったんじゃ、ミサカの出番はも  
うないしね、ってミサカはミサカは安全圏まで下がってみたり」  
勝算だつてあるわけないのに。

上条たちは当たり前のように巻き込まれにきた。

「来るな上条！お前だけでも逃げる！」

「はっ、上条さん特製チャーハンを食べずに別れるってか。ずいぶ

ん人生損するぜ!？」

まるで会話になっていない。

今の上条には逃げるとあと100回言っても無駄だろう。

「仕方ねえな……死んでもしらねえぞ」

「え?あのー、それってどういう…?」

上条が眉をひそめ、次の瞬間「うげっ」とうめいた。

男が携帯電話を操作して、仲間を呼んでいたからだ。

「てめえらが一人二人増えたって関係ねえ。素手で駆動鎧を破れるとも思えねえし、俺がその何十倍もの仲間を呼ぶだけなんだからな  
!！」

怒りに燃える男。

しかし、仲間からの応答がない。

「おい、どうし——」

「ボス!助けて……!この化け物、銃が効かな……ぎゃあああああ  
!！」

「はっああゝい、クソ野郎どもオ?只今からお迎えにあがりまあゝ  
す?なんのお迎えかは自分で考えるよオ?——ブツツ」

誰かの声が割り込んで、唐突に通話が切れる。

これで、増援は呼べない。

「チツ、仕方ねえ。装備は壊れちまったが、駆動鎧の馬力なら問題  
ねえな」

一人で100人を壊滅させられるのはかなり強力な能力者だが、こ  
ちらの居場所が知られているとは考えにくい。とつとこの二人を  
片づけてここを去ってしまおう。

そこで男は気付いた。

二人のガキが、こちらに走ってくる。

彼は飛び出した。

決闘世界の起動範囲に、入る。

(起動!!)

しかし、何も起こらない。

「んなっ!?!」

茫然としているところを、思いっきり殴られた。口の中に鉄の味が広がる。

「てめえええええっ!!がっ…!」

同じく上条もふっ飛ばされた。

(なぜだ…なぜ能力が使えない!?)

言うまでもなく原因は上条の右手に宿る幻想殺しなのだが、彼には知る由もなかった。

(能力が使えないなら、頭を使え。この状況をどう乗り越えるかだけを考えてろ)

考えろ。

敵は風速数十メートルの暴風でも吹き飛ばない駆動鎧。

対して、こちらは生身の高校生二人。

考えろ。

考えろ。

考えろ。

そして、結論は出た。

(無理だ)

どうやってても、自分が勝てるイメージが浮かばない。  
ここで終わりだった。

「くたばれ小僧!!」

強烈な一撃を喰らい、彼は汚い床に転がる。

「てめえにイイコトを教えてやる」

男は楽しそうに、彼を指さす。

「この野郎はな、どっかの国のエージェントだ。学園都市に寝返ったのは分かんねえが、こいつは絶対だ」

そして、今にも絶望した顔を見たいように、

「んでな、「任務」とやらを遂行するためには何だつてやるゲス野郎だ。コイツのせいでいくつのも人間が死んだ。女も子供も関係ねえ、「任務」のためならレベル4だって叩き潰す。絆だつて平気で引き裂く。そんな氷みてえに外道な、クソ野郎なんだよ」

そう言つて、彼の腹を蹴り続ける。

そんな人間のクズはこうなつて当たり前だ、というふうに。

「で、そんなのがなんで記憶喪失になつてるのかは知らねえ。だがな、一つだけ言つておく。そんな方法で、てめえの『罪』が赦されるわけがねえんだよおおっ!!」

男は彼を大きく蹴りあげると、

「ああつまんねえ。もういいや」

(もうここで、終わるのか)

彼はここで死ぬのだろう。未練はなかった。そのかわり、

「まあ仲間ならまだその辺にゴロゴロしてるし、俺はお前らを蹴散らしてとつと風紀委員を血祭りにあげに行きてえんだが」

初春だけは、守りたかった。

「なんでまだ立てんだよおおっ!!」

多分彼は、それを何度も何度も踏みにじってきたのだろ。たとえば記憶を失ったからといって、自分がやってきたそれから目をそらすのは絶対に許されなはずだ。だからこそ、守りたい。

でも、今のままでは、守れない。

それでは、どうするか。

向き合う。

自分の、その罪から。

自分が奪ってきた、たくさんの温かい思い。

それを、償うのだ。

真理。

それは、彼のポケットに収まっていた。

一枚のカードとして。

インデックスは、とことこと歩いていた。

昼を過ぎても上条が帰ってこないの、フラフラと出てきたのだ。

「むづ……またとうまは不幸な女の子を助けてるんだね？ 私には分かるんだよ」

正確には男の子なのだが、それを除けばだいたい合っている。彼女は伊達に完全記憶能力を持っていないのだった。

「っ！？」

急にある気配を察知し、インデックスは振り向いた。魔導図書館である彼女の頭が警報を発している。

「そんな……まさか、アレは……！！」

方向を変えて走りだす。

その方向には、一つの廃倉庫があり。

科学が蔓延する学園都市に存在するとは考えられないモノだった。



## 第八話 罪（後書き）

お久しぶりです。わらびもちです。

単刀直入に言います。

感想や、意見が欲しいです。

どうぞ手軽に書きこんで下さい。

イン…？「ついでにひょうかボタンも押してくれると嬉しいかも」

## 第九話 明るい日差し（前書き）

やっと第二章が終わります。

思えば、長い道のりでした。

今季見る予定だったアニメをいくつも切ってここに回し、夜な夜な作業妨害用BGMを掛けながら書いていた日々。いやー、割と大変でしたよ、BGMを無視しながら書くのは。

……、一応言っておきますがまだ完結しませんよ？

## 第九話 明るい日差し

「な…なんだ…!？」

上条は目を疑った。無理もない。

いきなり彼の背に一对の翼が現れたからだ。

一方は天使のような白。

もう一方は悪魔のような黒。

相いれない二つの色は決して混ざり合う事なく、ただ、そこに存在した。

善と悪。

それが、この世界の『真理』だともいうように。

警備員から駆動鎧を奪った男は、困惑していた。

(なんだ、これは)

彼が何らかの理由で能力が…あの忌々しい、なぜ低能力に指定されているのかも分からない能力を使えないのは確実だろう。過去に一度、彼の「任務」を邪魔したから、という理由で殺されかけた男には分かる。しかし。

(あんなのは、見た事ねえぞ!!!)

彼は、あのような翼など使っていなかったはずだ。だとしたら、いつ翼なんて身につけたのか。

まさか、今？

「とうまー!!」

廃倉庫に、インデックスが入ってきた。上条の横まで走る。すでに息は切れている。

「インデックスお前、留守番じゃ」

「聞いてとうまー!!あの人が危ない!!」

彼女は上条の言葉をさえぎり、叫ぶ。

「あれは古代エジプトの『マアトの羽』……なんであの人に宿ってるかは知らないけど、凄く拒絶反応を起こしてる!そもそも人間の中にそんなモノが収まりきるはずがないの!」

上条には危険な状態かどうかも分からなかったが、十万三千冊もの魔導書をその身に有すインデックスから見れば、一目でわかるのだろう。

「しかもあれは人間の方が自分の『罪』を自覚してる!!このままじゃ『羽』と一緒に消滅しちゃうんだよ!!」

その言葉に反応したのは、上条ではなく男だった。

「あははははははっ!!こりゃ面白え!!自分の『罪』で死ぬなんてよお!!このクソ野郎にはふさわしい最期だよなあ!!」

「あの、野郎!!インデックス、その『羽』とやらも異能のチカラなんだよな、だったら」

「ダメ!!」

またもやインデックスは、上条の言葉をさえぎる。

「『羽』はあの人と直結してる。下手に干渉すると精神を崩壊させちゃうんだよ!!」

「な…だったら、どうすりゃいいんだ!!」

「自分の罪を自覚して、償うか……大切な人に赦してもらおう事。それが唯一の方法だよ」

「罪を、自覚……?」

困惑する上条は、彼へと視線を向ける。

すると彼は、首とグリン!!と回して男を見た。

もはやそこには、人間の面影はどこにもなかった。

男は急に視界を奪われた。

「なんだ……」

気がつくくと、真つ暗闇に巨大な天秤が浮かんでいる。

男はその片皿に乗っているのであった。

「どうなつてやがる」

さつきまで、廃倉庫にいたはずだ。

それがまるで、別の空間に連れ去られたようだ。

否。

別の世界に――。

カツン、といった音が響いた。

目をやると、もうひとつの皿に彼が乗っていた。

“『マアトの羽』は、人の罪を計る”

どこからともなく、そんな声が響いた。心に直接はなしかけられているようだ。

“貴様の罪の重さを、思い知れ”

次の瞬間、男の乗った皿が急激に傾いた。バランスがとれず、天秤から転がり落ちる。

奈落へと落ちていく彼に、声が響いた。

“裁きを受けよ”

彼と繋がった翼から、光が放たれた。

その光は男の身体を貫き、壁に激突させてようやく消える。

「がっ……て、めえ。俺の罪がこの重さなら、お前の罪つてのは、  
一体……」

男は意味不明の言葉を呟き、気絶する。

上条は訳が分からなかった。

急に男の動きが止まったかと思うと、そのまま光の攻撃を受けたのだ。

「古代エジプトでは、特殊な天秤に『マアトの羽』と死者の心臓を乗せて、どちらに傾くかで天国に行くか地獄に行くかを決めていた」  
インデックスが話す。

「マアトは正義、秩序、そして真理を表す。裁判を行うにはもってこいなんだよ。でも今はそっちじゃない。助けよう、とうま。私たちの手で」

「当たり前だ。で、どうやるんだ」

「一番手軽なのは、名前を呼んでこちらに振り向かせる事。意識がこちらに集中すれば、こっちもやりやすくなるんだよ。だけど……」  
上条は彼女の言いたい事を理解した。

彼は記憶喪失だ。

だから、自分の名前すら分からない——！！

「どうすれば、いいんだ」

奥歯を噛む上条の後ろから、

「どうにかしなくては、あれが暴れまわるだけですの」

といった声が聞こえた。

「な、白井!？」

「初春。もはやグダグダ言っている場合ではありませんのよ?一刻も早く止めねば、一般人に被害が出ますの」

白井は電話をしながら、インデックスの服を掴んで空間移動する。一人残された上条はハツとして、翼からの光を右手で受け止める。

「あの時とはまた違う状態ですね。恐らくあのカードと能力が連動してあれが発動している……？」

上条の向かい側で白井は通話を切って考察する。

「場合によつては、学園都市製の最新兵器の投入も考えられますの」

「そんな……！」

白井に掴まれたままのインデックスが叫ぶ。それは救いとは最も遠い解決方法だ。彼女らシスターは、人を救うために活動しているのに。

「ふ、ざけんな……！」

上条は歯をかみ砕かんばかりにかみしめる。

このままでは、彼は消えてしまう。

どんな奇跡も、呪いも、幸運でさえも、

一瞬で消し去るこの右手があるというのに。

自分がこんなに、無力だったなんて。

しかし、上条は最後の希望までは打ち消してはいなかった。

「はあっ、はっ………やっと見つけましたよ」

その希望は、頭に大きな花飾りをいくつもくっつけていた。短い黒髪が小さく揺れる。

その小柄な身体は、翼の光など受けたら塵も残さず消えてしまいうで……それなのに、絶対に倒れない。

初春飾利が、そこにいた。

「初春！？ここは危険ですよ、早く下がって!!」  
白井は叫ぶ。だが、初春は彼しか見ていなかった。

「……こんなところで、何をしてるんですか」  
言った瞬間、初春の手前の地面が爆発した。  
翼の光だ。

「初春ッ!!」

「大丈夫、です」

煙が晴れると、初春はまだ、立っていた。

しかし、砂利が当たったのだらう、額からは血がにじんでいる。

「きつと、彼のほうが辛いですから。だったら、私が助けてあげなくちゃ……」

私は、風紀委員なんですから!!」

初春はさらに一步踏み出す。

すると、再び翼の光が襲いかかった。

「ッ!!」

初春の小柄な身体はその衝撃に耐えきれない。無様に床に転がる。

「……、こんなところじゃないで、早く帰りましょう。御坂さんたちも、きつと心配してますよ」

それでも、初春はあきらめなかった。

なぜなら、彼女は風紀委員だから。  
困っている人を助けるのが仕事だから。  
たとえ狂ってしまったても、拒絶されても、関係ない。  
出会ったばかりの他人を助けるために、初春飾利は立ち上がる。

「っ！！」

気付けば、彼女は彼の目の前まで歩んできていた。

翼を広げる前に、初春の小さな手のひらが彼の頬をそつとなでる。  
まるで、慈愛に満ちた母親のように。

たとえそれが、何の解決にもならない、ただの気休めだったとしても、関係ない。

だって彼は、一度たりともそんな事をしてもらった事がないのだから。  
うから。

「ダメだよ！名前を呼んであげないと、こっちも振り向きもしてくれないんだよ、今の彼は！！」

遠くにいる銀髪のシスターが、叫ぶ。

なんだ、そんなことか、と初春は心で笑う。

名前がないなら、つけてあげればいいだけだ。

「夏野………雪人さん」

初春は、たった今ここで考えた名前を口にする。

すると、彼の動きが緩慢になっていく。

まるで、母親に子守唄でも歌ってもらっているように。

「私が、赦してあげますから」

いつからか、少女の歌が始まっていた。

心に直接響く、赦罪の歌声。

その歌と呼応するように、二色の翼の輪郭も薄くなっていく。

「だから、そんなつまらないところで、いつまでも悩んでないで下さい」

そして、人間らしい表情を取り戻した彼の瞳から、一筋の涙が流れ

た。

さながら、氷が溶けて水になるように。

「さあ、帰りましょう。シアワセで楽しくて、いつも笑顔が絶えない、暖かい日常へ」

いつしか歌は止んでいた。

にっこり笑顔を浮かべるインデックスと、いまいち状況のみこめてない白井と上条が走り寄ってくる。

不意に力の抜け、気を失った彼は、そのまま初春を押し倒した。

「わわっ……」

真っ赤になる初春だが、穏やかな表情の彼を見ると、安心したように笑顔を浮かべる。

外からは警備員が突入してくる音が聞こえた。

それが初春にはどうしても、明るい日差しからの招待状のように感じられた。

上条の携帯には、こんな留守電が入っていた。

『ミサカはお迎えが来たから先に帰るね、ってミサカはミサカは事後報告してみる』

何やら後ろのほうから、わざわざ病院抜け出して暴れもした俺に対しては何もねエのかクソガキ、といった声が聞こえた。

「……………う……？」

何度めのデジャブだろう。

自分はベッドに寝かされていて、それを毎回違う顔がのぞきこんでいるのだ。

だが今回は違った。

それは、自分の脇にいるのは、初春飾利だからだ。

「あ、起きました？」

初春は彼を見て、にへら、と締まりのない笑みを浮かべる。その顔は心から彼を心配してくれている顔だ。それを見て、彼は決心した。

この少女のそばに居よう。

そして、初春飾利とその周りの世界を、必ず守ろう。

少年の意思は固く、絶対に折れるつもりはなかった。

## 第九話 明るい日差し（後書き）

次回からは日常編を予定しております。  
あと、評価と感想が欲しいです。 じっくり

## 第十話 欠陥電気（レディオノイズ）（前書き）

：ちなみに、今作品の時間軸は現在8巻です。  
雪人がまったり（？）一日を過ごしているうちに、『残骸』をめぐ  
る戦いが起きてたりします。

## 第十話 欠陥電気（レディオノイズ）

「……朝か」

朝をうるさくする小鳥たちの喧騒で、彼——夏野雪人は目を覚ました。それほど高くない天井を見つめる。

「それにしても、小鳥たち……ね」

雪人は記憶喪失だ。

しかし、記憶を失う前の彼は、祖国の、時には学園都市のエージェントとして、数々の「任務」という名の虐殺を行ってきたらしい事が分かつている。

そんな雪人には、小鳥なんて可愛らしい表現は似合わない。彼は自嘲ぎみに呟いた。

「そんなクス野郎がこんな暖かいところにいてもいいのかな」

「大丈夫、ですよ」

「っ！？」

突如、彼の胸のあたりから邪気のない声が聞こえた。

実は、彼は先日退院許可をもらい（あの力エル顔の医者は「お幸せにね」などと言っていたが）、こうして初春の寮に帰ってきた訳である。

女子寮に男がいても大丈夫なのだろうか、と思ったが、上条の寮にはインデックスという食欲少女が居候しているのでそこは触れなかった（もしそう言ったら、初春は顔を真っ赤にしただろうが、彼が今まで好意のようなものとは無縁な生活を送っていたため、彼はそのあたりは鈍かった）。まあとりあえず、雪人は光の世界へと帰ってきたのである。

で、朝になつたので起きたのだが、なぜか隣で寝ていた初春が彼の布団に侵入していた。

「…………むうん、大きいパフエ…………今私が食べてあげますからね…………」  
やけにパジャマを色っぽく着崩した初春は、仰向けの雪人に乗った姿勢のまま彼の耳たぶを甘噛みする。雪人の視線からだど、ポタンが三つほど開いた寝巻から谷間…………いやミゾが見える。

「…っ！…………っっ！」  
限界だった。

顔を真っ赤にした雪人は、なんとか初春の下から抜け出し、彼女に毛布を掛けてやる。

学園都市の秋は早い。九月に入ると、急に肌寒くなってくる。風邪をひいてはいけないだろう。

「…たく…」

雪人はそっと、初春の頭をなでる。

初春の部屋は両側に二段ベッドの上だけバージョンがあるのだが、それらは両方とも使われていない。

昨日帰ってきた初春が風呂に入るとすぐに寝てしまったため、雪人が布団を下ろして寝かせたのだ。

ちなみになぜ雪人までが下で寝ていたのかは本人にも分からない。甘えでもあったのだろうか。

しかし彼の今一番の問題はそこではない。

「……………くそっ」

離れない。

脳裏から、どうしても離れないのだ。

そう、さっきの初春の体温とか、柔らかい感触とか、吐息の熱っぽさが。

「くそおおおおおおおっ！！！！」

「！」マークの多さの割には近所迷惑を考慮して叫びながら、彼は玄関を飛び出した。

ちなみに彼はずっと学生服のままなので、とりあえずほかの服を買うためでもあるのだが、

さすがにこの時間帯では服屋は開いていない。

「はあっ……はあっ……」

雪人は自販機で買った冷たい烏龍茶に口をつけた。

初春の寮から一キロを全力疾走。さすが元エージェント、身体はかなり鍛えていたようだ。

「撒いたか……？」

しかし、彼が息を荒げているのは、走ったからではない。

一人のカナヅチを持った少年に追い回されているからだ。

実は彼が走っている時、その少年がちょうどATMを強奪しようとしているところに居合わせてしまったのだ。

幸か不幸か、単独の犯行のようだったので仲間が呼ばれる可能性は低そうだったが、武器を持っている相手を警戒しないわけにもいかない。だが、

「見つけたぞオラアッ！！」

見つかってしまった。

「……仕方ねえな」

本当に仕方がないので、雪人も拳を握る。

あくまで丁寧な相手をしてあげた。

不意にヒュウ、と口笛が聞こえた。振り返ると、長身の女性が立っていた。ジャージだ。

「やるじゃん。そいつだって身体は強いのに」

「……誰だ」

雪人は眉をひそめつつ答える。

「警備員じゃん。まったく、ずいぶん派手にやってくれたもんじゃん」  
「げっ、と彼はうめいた。」

警備員は俗にいう警察だ。この状況からするに、自分を捕まえにきたと思っただのだが、

「ま、見ていて楽しい馬鹿は嫌いじゃないけどね」  
「どうやら違うようだ。」

「あんた強いけど、まだまだ動きに無駄が多いじゃん。私でよければつきつきりで相手してやるじゃん。いつでも来るじゃんよ」

ジャージの女はやたらでかい胸部を揺らしてポケットから紙を取り出すと、彼に手渡す。

その名刺らしい紙には、警備員 黄泉川愛穂と書かれていた。

「さあこい浜面。これで何度めだと思ってる？」

「いやだあつ、俺の出番これだけなんてやだあああつ!!」

という少年の魂の叫びを残して爆乳警備員は去った。

とりあえず名刺をポケットにしまい、なんとなく呟く。

「……嵐のような人たちだったな」

とある病院で、一方通行は目を覚ました。  
アクセラレータ

隣でクソガキがなにやらゴソゴソとやっていたからだ。

「おお、『強欲で謙虚な壺』とはなかなかチャーミングなネーミングかも、ってミサカはミサカはこのブサイクな壺のカードをほめてみたり」

「……ナニやってんだ、クソガキ」

一方通行は嘆息する。とりあえず、自分の腹の上でパック開封はやめてほしかった。

「あのね、ミサカは箱買いっていうリッチな大人買いを試してみたの、ってミサカはミサカは自慢してみる」

「ああそおかいところで人様に乗っかってパック開封は最近の流行りなのか!？」

「そしたらこうなったの、ってミサカはミサカは状況報告してみる」  
「無視かよ。……あん?」『エフェクト・ヴェーラー』3枚に『スクラップ・ドラゴン』、『強欲で謙虚な壺』3枚 e t c …… オマエ運よすぎねエか!？」

「えへへー、いいでしょ、ってミサカはミサカは自慢しておいて交換してあげないっていう非道なコンボを試してみたり!」

デュエルモンスターズは、今や最強の能力者もたしなむ世界最大の娯楽となっていた。

しかしただの娯楽ではない事に気づいているのは、一体何人いるのだろうか。

「あ、おかえりなさい。って、その汗どうしたんですか?」

「いや、ただ一時間近く走りまわっただけだ」

それから数十分後、雪人は初春の寮に帰って来た。彼が気付く訳もないが、初春の頬がほんのりと染まっている。寝ぼけて雪人の布団に突撃した事に気づいているのだ。

「じゃあ私学校行ってきますね。お昼ご飯はどうしましょうか」

「勝手に買って食べるよ。悪いし」

そう言いながら、雪人はただ居候するのは悪いな、掃除でもしておか、と、ニートシスター・インデックスを抱える少年・上条当麻

が聞いたら涙を流しかねない事を考えた。

「ええと、今日は風紀委員の仕事が長引きそうなので……遅れるかもしれないので、もしかしたら夕飯も一人にしちゃうかもしれないんですけど」

どこことなく寂しそうに、初春は呟く。

それを見た雪人は、慌てて手を振る。

「いや、俺は一人は慣れてるし、大丈夫だ」

「それならよっぽどですよ！いつかは雪人さんも学校に行くんですし、人と関わるのに慣れなくちゃだめです！」

なぜか気のきくお姉さんモードへとモードチェンジした初春に、彼はうなずく。

「じゃあ、できるだけ早く帰ってきて下さいね！」

そう言っつて、初春は玄関を出た。

「人との、関わりあい……ね」

雪人はカーペットに横になって、思う。

「だめだな。やっぱだめだ。人に好意を向けられるのは、慣れねえよ」

雪人は記憶喪失だ。

しかし、消えたのはあくまで思い出だけであつて、知識や反射神経、感覚などは失っていない。

ゆえに、自分の苦手な感情も感覚として覚えているのである。

「せめて憎悪とかなら、慣れてるんだが……」

そう言っつて、寝返りをうつ。

だが、だからといってその好意を拒絶するわけにもいかない。そうしたら、再び血も涙もないエージェントに戻ってしまう。

「ですが光の世界で生きるのならそれに慣れる必要がありますが、とミサカは忠告します」

「そう、だよな……って、あ？」

突然聞こえた平坦な声に、雪人は顔を上げる。

そこに、いつのまにか部屋にさがりこんでいる御坂美琴がいた。

「お前…勝手に入ってくるなよ……」

居候のくせに雪人はそう言う。そういえば、鍵を掛けてなかった。

「いえ、ミサカはミサカであって、お姉様オリジナルではありません、とミサカはもはやいろんな人に説明しすぎて疲れている説明をします」

いちいち無表情な少女だった。顔つきなどはそっくりだが、もしかすると美琴ではないのかもしれない。

「……ていうか、会話になってないぞ。説明を頼む」

「仕方がないのでイチから説明しますね、とミサカは説明を開始します」

そう言つて、ミサカと名乗った少女は語り始めた。

自分はレベル5量産するため作られた、超電磁砲の劣化クローン20001体のうちの1体である事。

しかし全く同じ体細胞を使用したにも関わらず、レベル5どころかレベル2、3くらいのチカラしか宿らなかつた事。

実験が失敗だと思われていたところ、『絶対能力進化（レベル6シフト）』という実験に拾ってもらつた事。

そこで、『無敵』であるレベル6に到達するために学園都市最強の能力者に延々と虐殺されてきた事。

そんなところに、とある普通の高校生が介入してきて、実験は中止させられた事。

今は病院にて、治療を受けている事。

「ちよつと待て。今虐殺とか不穏な単語が聞こえたぞ」

「ミサカは事実を述べただけですが、とミサカはあなたの頭の悪さに落胆します」

雪人はムツとしたが、表情には出さないようにする。

「……だとしたら、可哀想だよな」

「同情されても嬉しくありません、とミサカは――」

「お前らじゃねえよ」

「？」

「その最強の能力者の方だよ。多分そいつ、人間一人じゃかかえきれないほどの『罪』を自覚してる。例え世界の全てがそいつを許したとしても、そいつ自身が自分の『罪』を許せない」

自分も同じだから、分かる。

「俺も同じだから、分かる。払えきれない負債を前に、ただ立ち尽くすしかできないんだよ、俺達は。利子に食い潰される程度しかない支払い能力しか持っていないのに、どうすればいいんだ、ってな」

気付けば、気まずい沈黙が訪れていた。

空気を替えるために、彼は慌てて話題をそらす。

「そ、そついえばその実験とやらと止めた高校生つてもスゴイよな。ただ一人ですごい能力者（レベル5）を倒すなんてさ」

もしかすると雪人の能力でも倒す事は可能かもしれない。しかし、彼は自分の能力を制御するどころか、完全に理解もしていない。うかつに使うのは控えるべきだった。

「そうでした、とミサカはここに来た理由を思い出します。ミサカは病院で外出許可が出たので、とある集計を取りに来たのです、とミサカは追記します」

「まあそれはいいけど……なんでここなんだ？」

「なぜなら男性の知り合いが、ミサカたちには極端に少ないからです、とミサカは理由を述べます。女性の知り合いもこれと違ってないので、お姉様オリジナルの知り合いづてにあたってみようとしたところ、都合よくあなたに出会った訳です、とミサカは」

「……その集計内容、ちょっと分かってきたかもしれん」

ミサカと名乗った少女は無表情に言った。雪人としては、なんで実験を止めた高校生の話で集計を取る事を思い出すんだろうとか思う。

「集計内容は、『世の男性の一般的な女性のタイプは？』です、と  
ミサカは全ミサカが総力を挙げて取り組んでいる問題を提起します」  
「……やっぱりか」

雪人の慌ただししい一日は、続く。

## 第十話 欠陥電気（レディオノイズ）（後書き）

……文字数がハンパだったので、中途半端なところで次回に続いています。

次回も日常編です。

事実上の二一ト達の一日……書いてて楽しいです、意外に。

第十一話 無職者たちの昼下がり（前書き）

やべえテスト近え、でも書く

## 第十一話 無職者たちの昼下がり

「…………つまり、自分の周りに男が少ないから、ためしに一般女性の女性のタイプを探ってみようって事か」

「そういう事です、とミサカは肯定します」

我らが（？）主人公、夏野雪人の一日は、午前十一時を回ってようやく日常らしくなってきた。

つまりは、ようやくほのぼのした感じになってきたのである。……

まあ、他人の寮で数万体もの軍用クローンの一人と会話してる事が日常なのかは疑問であるが。

「…………急にそんな事聞かれても…………困るぞ。俺女に興味ないし」

「つまりはそういう趣味なのですね、とミサカは察してあげます」

「違うっ！！」

このやりとりはいつかどこかでやったような気がする。…………もしかあのカエル医者、彼女らに変な事教えてないだろうな…………と、命の恩人に対してひどい評価をする我らが主人公なのであった。

「ふむ。それならば、とミサカは参考になるように今までの集計結果を見せます」

あんまり乗り気でない雪人に見せつけるように、ミサカはどこから取り出したのか、大きなフリップボードを取り出す。

そこには。

「…………おなががすいたんだよ」

若干涼しくなってきた寮のベッドの上で、インデックスは目を覚ました。すでに時刻は十一時を回っていた。これは一日三食以上を心がける彼女にとって致命的なミスである。

「とうま、ごほん……って、あれ？」

当然ながら、家主である上条は学校だ。ならば、昼飯が冷蔵庫に入っていたりしてもおかしくないのだが、探してもない。

「……未曾有の危機かも……」

ペット禁止の寮則をぶつちぎって飼っている三毛猫を抱えたまま、インデックスは絶望をかみしめる。

ちなみに『昼飯は缶づめの消費期限が切れそうだから適当に喰ってけ』という書き置きが彼女自身の足によってグシャグシャになっている事など、インデックス、ましてや上条の知る由もなかった。

「あんの……クソガキがアアアアア！」

病院の一室で、一方通行は叫んだ。アクセラレータ彼の手には、書き置きが一つ。

『病院食飽きたからシャバの美味しいもん探しに旅に出ます、ってミサカはミサカは外出大作戦』

これではまた迎えに行かなければならない。その段階でもしまた戦闘なんて事になったら、八つ当たりでそこらのビルが将棋倒しを起すかもしれない。どちらにしろ、彼は打ち止めを探さなければいけないという事だ。

「ったく、面倒くせエ」

そう言つて、一方通行は病室を出た。

ちなみに、さっきの叫びが十数時間遅かったら、その声を聞いた超電磁砲と邂逅する事になり、病院が大いに荒れる事になっただろう。

『やっぱロリが一番だにゃー。それがメイドとかだったら最高。言う事なしですたい』

『何を言うか！！お前は守備範囲が狭すぎなんだぜボケ！！ボクなんて全方位完全解放です！！この青髪ピアスをなめるでない！！』

「おい口に出して言うなそんな事！いろいろ誤解されんだろ！」

ミサカはフリップに書いてある事をそのまま読み始めた。周りの住民に聞かれたらどうしようかと思っただが、ここは学生寮。住民の多くが今は学校へと出向いている訳である。むしろ雪人やミサカ等のほうが例外といえる。

「これで参考になりましたか、とミサカはいい加減に何か言えと催促します」

「そんなが参考になるかつ！……もうなんでもいいや」

「では『女子中学生がドストライク』という事ですね、とミサカはそうなるとミサカにも魔の手が及ぶのでは……と危惧します」

「ぶっ！？なんでそうなるんだよ！」

「しかし現にあなたは初春飾利嬢の部屋に我が物顔で居座っているではありませんか、とするとあなたは女子中学生に手を出したスゴイ人になるので、当然好みもそのあたりなのは、とミサカは推測します」

「なんだその勝手な見解は。……はあ、もういい、それでいいぞ」この投げやりな答えが、自分に牙をむくとは……この時の雪人は知る由もなかった。

まあ作者がこの伏線を忘れなかったら、だが。……ん？ぐああああああああああああ？！？？

「どうやら適当な作者に天罰が下ったようですね、とミサカは超電磁砲の威力に素直に感嘆します」

「？」

「上条、言葉借りるぞ……不幸だああああああああっ！！」  
時は午後12時半。ここは第七学区のあるファミレス。

雪人は、諭吉たちが飛ぶようになっていくのを予感した。

目の前には見知った顔のインデックス、打ち止め、あと一万なんたら号とか検体番号とやらを述べてきたミサカ。

事の発端は、雪人自身がお金を持ってないミサカに昼食を奢ってやるうとした、ちよつとした善意から始まった。記憶を失う前の彼は善意とはかけ離れた生活を送っていたはずだが、それは初春が教えてくれたのかもしれない。

しかし、誰が予想しただろうか。

空腹を訴えてきた打ち止めと、その数十倍ものキャパシティを誇るインデックスに遭遇するなんて。

「インデックス……言つとくが、千円までだぞ」

念を押しておくが、メニューを手にしたインデックスは聞いてないらしい。雪人は溜息をつく。

そして、天をみあげる。

「グッバイ、俺の諭吉……」

「今日はお世話になりました、とミサカはあんまり世話になってなかったような気がしますけどとりあえずお礼を言います」

「なんか引つかかるもの言いだな、それ……まあいいけど」

「またどこかで会いましょう、それが光の中か闇の奥か、どちらな

の分かりませんが、とミサカは意味深なセリフを残して立ち去ります」

「おう」

午後三時を過ぎると病院の外出許可時間が終了してしまつらしいミサカとは、もう雪人に色々なトラウマを植え付けたファミレスを出たところで別れた。あのカエル医者には本当に色々聞く必要があるようだ。

「ゆきひとの住んでるところって、どんなところ？」

隣を歩いている、諭吉を大量虐殺した張本人インデックスが問う。

打ち止めはない。というのも、突然

「はっ！？どこかから視線を感じる！どうやらミサカを探しにきたあの人が近くにいるみたい！ってミサカはミサカは……」  
などと言いだし、勝手にどこかへ行つてしまつたからだ。

雪人自身も強い気配を感じていた。それが保護者なら、心配する必要はないだろう。

「……まあ俺も居候だから、大きな顔はできないんだが……ん？」  
そついう雪人の目に、それは写つた。

三人の大柄な男が、初春の部屋の前に座り込み、なにやらゴソゴソやっているとこころを。

「もしかして、ゆきひとの住んでるところって、あそこ？」

「……良く気付いたな」

「だって、とうまがいつもあんな感じだから」

「……がんばれ上条。応援してるぞ」

そついいながら、雪人は静かに寮へと接近していく。

男たちはそれに気付かないようだった。

「おい」

男たちが振り返るより前に、雪人は全力でそのうちの一人のこめかみを殴りつけた。

残り二人が浮足立つが、ろくな抵抗もできずに沈められる。

「空き巣稼業か」

学園都市は学生の街だ。なので、時間帯によっては全く人はいなくなる。

だからそれを狙う人達もいる、という事だ。

「残念だが、相手が悪かったな」

ただ食っていくために犯罪を犯す彼らとは、雪人は根本的に違う。幼少時から特別な訓練を積んできた(らしい)雪人は、常人を超える能力を身につけているのだ。

「まったく、手間かけさせやがって……おいインデックス、もう来ても大丈夫……っ!？」

念のため遠くで待機させておいたインデックスに声をかけかけて、雪人は気付いた。

第三者が、後ろでうろたえている事を。

「え……い、一体何がどうなってるんですか!？」

(一般人!?なんでこんなところに……!?)

雪人は振り返るが、倒されていた男の一人が立ち上がるのが早かった。

「てめえ、こいつがどうなってもいいのか!！」

その一般人を羽交い絞めにする男。その手には、どこから取り出したのか、一本の金づちが握られている。

しかし、男は知らなかった。

雪人は特別な訓練を積んできた(らしい)ことに。

「んなっ!？」

雪人は素早く走り寄り、羽交い絞めにされている一般人の顔面スレスレのところに拳を通過させる。男はその事態についていけず、泡をふいて倒れ、小綺麗な階段を無様に転がっていった。それにぶつかり、ほかの男たちも転がっていく。

「つとと……」

さすがに全力パンチしては体勢を整えられず、雪人は前のめりに倒れる。

しかし彼は知らなかった。

あつという間に男から救い出し、今は押し倒す格好になっている一般人は、先日助けた佐天涙子である事に。

「え……？」

なぜかそのまま固まり、その体勢を維持する二人。

雪人が動けば事は終わるのだが、しかし彼は指一本動かせない。

その理由は制服ごしに触れている彼女の肌の感触であつたり、体温だつたり、甘い吐息だつたりした。

そしてそれが今朝の初春の感触を思い出させ、雪人はさらに硬直する。

しかも佐天は初春とはまた違い、制服の上からでも分かるくらい、胸のふくらみがあつて

ばちーン、といった間抜けなシャッター音が、そのふざけた雰囲気をつぶし殺した。

その瞬間、二人はやけに熱っぽい自分の頭を（物理的に）フル回転し、音源を捜す。

果たして、それは

「あ、このピコピコが勝手に」

「てめえわざとだろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおっ！！！！」

雪人の絶叫が、寮の周りに響き渡る。

時間帯が時間帯なので、近所迷惑にはならなかったそうなの。



## 第十一話 無職者たちの昼下がり（後書き）

ちよつと目を離れた隙にお気に入り登録&評価が増えました。万々歳です！

浜面「もっと評価が増えれば俺の出番も増えるらしい！頼む、まだの奴、評価してくれ！あんな扱いはもう嫌だ！（泣）」

第十二話 無職者×無能力者（レベル0）（前書き）

やっぱりテストをないがしろにする訳にもいかないですよね。  
って事で、一週間くらい雲隠れしたいと思います。

へへへ、一週間前なのにまだ範囲出ないんだぜ……？





「さて、この大荷物を運びますかね」  
彼はインデックスをおぶると、確かな足取りで歩き始めた。あたりはうす暗くなっていたが、雪人にとっては立派な明かりの中だった。

『現在第七学区では小規模の停電が起っています。信号機の機能が一時停止しているので、一部の道路では渋滞が懸念されます』  
午後七時。テレビをつけると、そんな内容のニュースをやっていた。特に他の番組が面白いわけではないので、テーブルにグターツもたれかかったままりモコンには触れていない。  
(なんつうか、飯おごったり空き巣ぶん殴ったり、俺が今まで見てきた中で一番バカみたいな一日だったけど)  
ゆっくりと、彼のまぶたが降りて行く。キャスターの音が段々遠く、不鮮明になっていく。

(……悪くねえ)  
深い、深い眠りに落ちていく雪人の口元は、わずかにほころんでいた。

朝をつるさくする小鳥たちの喧騒で、夏野雪人は目を覚ました。

「……ん？」





## 第十二話 無職者×無能力者（レベル0）（後書き）

余談ですが、アクセス数が一万を超えたら何かしらの企画をやりたいと思います。

まだ六千程度なので、精進していききたいと思います。

…テストも頑張ろうと思います。

## 第十三話 日常（前書き）

前回からかなりの間が空いてしまいました。

みなさん長らくお待たせしました！十三話です！

え？待ってない？……ちょっと自分を殴ってきます。

## 第十三話 日常

「先日起きた小規模停電ですが、現在電力はほぼ回復しており、今後の心配はないようです」

「あ、もう回復してる。今日は交通機関使えそうだよ初春」

「よかったです。せっかくの休日に電車が使えないから出かけられません、じゃ嫌ですもんね」

初春の部屋で、二人の少女はテレビをつけていた。どうやら交通状況の確認をしているらしい。

それはいいのだが、

「あー、初春さん」

「あ！今日は安売りってチラシに書いてありますよ！」

「……あの、佐天さん」

「その値段！？買いだね！！」

ガン無視されていた。

もしくは、スルーされていた。

端的に言えば、いじめが始まっていた。

まあそれも朝っぱらからタイホされても構わない位の事をしたからなのだが。

「……なあ、今日出かけるつつつてたけど、どこ行くんだ？」

「あれ？さつきからなんか聞こえますね」

「確かに。なんだろうね」

「……………」

結局、寮を出てからもずっと相手して貰えなかった。

実は初春の一連の行動は親友がいたためにちょっと強がったのであるな感じになってしまったのであり、心の中では真っ赤になってい

たのであったが、その事実は初春自身と読者諸君しか知らない。  
佐天はどうか、だって？初春と同じ心境かどうかは、ご想像にお任せします。

「……………まさかカードシヨップとはな」

雪人はその店の看板を見て呟いた。最近のシヨップは女の子も入りやすい雰囲気づくりをやっているらしい。時代はいい方向に傾いたなあ、としみじみと思う。もっとも、彼は昔を知らないのだが。

一通りシヨーケースを見て回った雪人は、シヨップの外で二人を待っていた。…今だに相手をしてもらえない。本気で謝る必要があるかもしれない。

「…！」

と、唐突に強力な気配を感じ取った。瞬間、彼の立っている道の向い側に、誰かが降り立つ。

その身体から滲みでるオーラのようなものは、間違いなく、学園都市の頂点…超能力者（レベル5）のものだった。

「ねえ初春。そろそろ許してあげてもいいんじゃない？」

シヨップ内で手頃なカードを選びつつ、佐天は隣の初春にささやく。

「ダメです」

「即答かいつ。」

押し倒された事もある自分が許しているのだから、初春も内心では許しているのだろうと勝手に当たりをつけていた佐天だったが、当の初春はそう簡単にはいかないようだ。

仕方がないので、少々強引な手をおおう。

「ていうか、もう待ち合わせの時間じゃない？……………もしかして初春、気まずいまま『あそこ』に行くつもり？」

「…！」

面白いように反応する初春。

佐天は追い打ちをかける。



二倍で飛んでいる。

連続して起こる衝撃はこの拳によるものだった。実際問題、この衝撃だけで彼らのいるビルはすでに半壊している。しかし、それを超越する動きをする者がいた。

雪人である。

「くそっ！！この速度についていくなんてもはやお前人間じゃねえぞ！！何食ったらそうなるんだ！！」

「知るかそんなもん！！」

雪人は事前の拳の動きから、彼の攻撃を予測して避けているだけだ。ただ、それがものすごく速い。

数値で表すなら……音速の二倍といったところか。

（なんつうか、ここまで自分を化け物じみて思う事ってないよなあ……）

何せ、学園都市230万人のうち七番目の化け物と渡り合っているのだから。

簡単そうに見えて簡単に避け続けているが、どう考えてもまともに受ければ即死である。

（どうして、ここまでひどい展開になっちゃったのかな）

雪人はたった半時間前の事を思い出す。

歩道の向こう側に降り立った超能力者。

果たしてそれは、自らの最強のカテゴリの中で最弱の者と名乗った。そして、その称号は自分の根性を鍛えるには大して意味はないとだからなんだよというニュアンスの投げやりな雪人の返答に、そのヲトコはこう返した。

「お前は根性がありそうだ！俺が鍛え直してやる！」  
会話になってない会話である。

とはいえ、雪人自身もずっと無視され続けてきたストレスがたまっていたので、これに応じた。

まあ、削板少年にも人を見る目はあったのだろう。

まさか一般人に音速の拳を放つ訳にもいくまい。

「でも、そろそろ飽きたな」

「なんだとおっ！？ちくしょう頑張れ俺の根性！！」

力む削板軍覇。しかし彼の拳はかすりもしない。

だが衝撃の余波はバカにならず、わずかに残っていた壁を撃ち抜いた。

（一般人が近寄らないといいけど）

そんな雪人のささやかな願いは、打ち砕かれた。

「雪人さん！？まさか、そっちにいるんですか！？」

下の方から聞こえたのは、彼が一番巻き込みたくない一般人……初春飾利の声。

「バカ野郎！！来るんじゃねえ！！」

「え！？」

間の抜けた初春の声とともに、小柄な影が階段部分に現れる。と同時に、風穴だらけのビルが耐えきれないように崩壊した。

当然、その瓦礫は無垢な少女のもとへも降り注ぐ。

その瞬間、雪人は何もかもを忘れて走りだした。

音速の拳が迫るとか、瓦礫は自分にも向かっているとか、そんな些細な事はどうでもいい。

「間に合え！！」

その時。

「ナンバーセブン根性おおおおおおおおおっ！！！！」

最大原石が能力『説明のできない力』の、理解不能な突風。

何かが働いて、瓦礫を木端微塵に砕き去る。

「ちくしょう！何が鍛えてやるだ！！根性無しは俺じゃねえか！！  
テメエの勝手な都合で周りを巻き込んでいいなんてありえねえ！！  
それすら忘れるなんて、俺は……俺はあああつ！！」

ナンバーセブンは絶叫した。

そして、

「あんたは俺に大事な事を思い出させてくれた！今から師匠と呼ばせていただきます師匠！何なりとお申し付けを！！」

やはり、彼には重大な言語能力の欠陥があるようだ。いきなり、何を言ってるのかさっぱり分からない。

「いや、俺そんなの知らないから」

「例えあなたが何を仰ろうと、俺はあなたについていきます！！」

ダイナミック 土下座を決め込むナンバーセブン。それを見て

「まあ、いいか」

と雪人が言ったのは、その態度に感心したからではなく、

(いざって時は手足として使えそうだしな)

だからである。

「ありがとうございます！！これからは、トイレの中までついていきます！！」

「来んなっ！！」

適当に削板と携帯番号を交換して去ると、雪人はふと気付いた。

「そういえば……スルーフェイズはもう終了したのか？」

「ひゃうっ！！」

雪人の言葉に、初春は分かりやすくおろおろし始める。

「あ、のその、それは……なんてことない感情で雪人さんにひどいことした私にも非があるっていうか……えっと……ごめんなさい」

「……おう。」

なんだか気まずい雰囲気。これが謝罪フェイズか。

(まずい。この気まずさは相当まずい！！天使でも悪魔でもいい！

！誰か、このふざけた幻想(空気)をぶち殺してくれ！！)すると、

「初春ー？いきなり走っていかないで……って、あ。仲直り成功？もしかして」

ひょっこり出てきたその人は。

今日の格言・佐天さんマジ佐天使！！

## 第十三話 日常（後書き）

高校二年って進路とかも考えなくちゃですし、大変ですなあ。

明日体育祭の朝練だし……orz

最近の格言：試験なんて消滅すればいいのに。

#### 第十四話 教皇代理（前書き）

お久しぶりです。

いろいろ宿題とかで忙しかったので、遅れました。申し訳ないです。

ユキ「てきとうすぎるだろ……」

しかも駄文です。

## 第十四話 教皇代理

「まさか白井が入院してたなんて……聞いてなかったぞ」

「お、教える時間がなかったの……」

ここは第七学区の病院の個人の病室。

昨日、白井は『残骸』というものをめぐって上位の空間移動能力者と戦い、大けがを負っていた。

「お姉様ッ！！どうかこの黒子めにウサギさんカットのリングををををッ！！」

「バカ寝てなさい！！」

のだが、治療が快調に進んでいるのを差し引いても白井は超元気だった。いきなり驚愕の事実をつきつけられ、心配した分を返して欲しい雪人である。

（まあ、この分なら問題はないな）

彼には守るものがある。

それは初春飾利であり、彼女を取り巻く暖かい世界でもある。

何はともあれ、それは今は守られている。

それで十分だ。

今の雪人には、壁に体重を預け、溜息をつきながら合流した御坂と白井のコントをよくなやりとりを苦笑しながら見ている余裕があった。

なくなったのは、御坂と佐天とも別れた帰り道、とある大型の呉服屋に入ってからだった。

「…………え？」

ここは、とある大型の呉服屋の試着室。

カーテンを閉ざされた密室で放たれた声は、無垢な少女のものだった。

その声色に合わせるように、等身大の鏡には一人の少女の姿が。腰まで届く金髪。

注意していないと壊れてしまいそうなイメージを喚起させる碧眼。

彼女はフリーサイズのパーカーを着て、派手なダメージ加工のされていないジーンズを穿いている。

この服装はついさっき買ったものだ。それは覚えている。

だが、少女が考えている事は服装のことではない。

どころか、女の子ならだれも考えない事だ。

すなわち、

「なんで…………女になってるんだ…………!？」

そう、美少女の姿をしてはいるが、中身はれっきとした野郎なのだ。

しかも、その正体が我らが主人公であるというから驚きである。

「おう、どうなったのよ？」

「のわあ!？」

いきなりカーテンが開けられ、ツンツン頭が現れる。

そうだ。

こいつが全ての元凶なのだ、と雪人(?)は回想モードに入る。

佐天と御坂と別れ、初春の寮に帰る道筋。

雪人は、ずいぶんと忘れられていたことを思い出す。

「そういえば、俺、ずっと学ランのままじゃいけないよな…………」  
服の購入。

それで二人は近くの大型呉服店へ出向き、ありきたりな服をいくつか買ったわけだが。

「おお、いたいた。アンタに渡すものがあるのよな」

いきなり変な人と出会った。しかもスルーできればよかつたのだが、思いつきり雪人に向かつて話しかけている。逃げられない。

「ええと、どちらさまで？」

彼は記憶喪失だ。

なので相手は自分を知ってるのに自分は相手を知らない、といった事も起こりえるのだが、正直、靴ひもの長さが一メートル以上ある上に首から小型の携帯扇風機を四つも五つもぶらさげている男が知り合いであつて欲しくない。

「まあとりあえずこれを受け取るのよ」

そういつて男が差し出したのは、『レイジアース』のカード。裏が黒い、一般的なスリーブに包まれている。

「なんだこれ？」

「ちよつと失礼」

「!？」

次の瞬間、雪人の頬に一筋の線が入り、一滴の血が垂れた。

男はここぞとばかりにカードに血をなすりつける。

「いやー、悪い悪い。でも儀式上必要なもんでな、許して欲しいのよな」

男はそういつて笑うが、雪人は警戒度がいつきに数倍にもふくれあがらせた。彼に傷をつけるものは、ただものではない。

「何者だ？」

雪人は身構えた。もし戦闘になったら、一般人が巻き込まれないよなところまで誘導しなければならぬ。

「いやいや、それほどのもんでもないさ。ちよつとお偉いさんにごき使われてるだけなのよ」

天草式十字樓教といつても分からんだろうし、と男は付け加える。

「…俺をどうするつもりだ？」

「どうもせんよ。そいつを渡してお前さんの血を一滴垂らしただけで仕事は終わり。あとはとっととイギリスまで飛んでいくだけなのよ」

男はわずかな時間だがまさか学園都市にホイホイ入れるとは思わなかったな、とも言つ。

「でもまあ正常に機能するか分からんし、使い方も教えてやるのよ来な」

雪人はずっと空気扱いされている隣の初春に目をやって、それから静かに男についていった。

この男の言っている事が全て嘘だったとしても、初春を巻き込みたくない。

その後、雪人がとらされた行動は実にシンプルだった。

いくつかある試着室の一つに入り、今買った服に着替える。その後、

スリーブからいったん取り出した『レイジアース』を裏返して、また入れる。

それだけ。

たったそれだけで、雪人は女になっていた。

「……説明してもらおうか」

「そんな可愛らしい顔と声ですごまれてもなあ」

対する男は真剣な表情をしているが、よく見ると必死に笑いをこらえているのが分かった。

「いいから!!」

今更だが、男の背が少しばかり大きくなっているのに気付く雪人。なにげに身長もいじられているようだ。

「いやあ、学園都市の者に魔術とかいっても信用して貰えなさそうなんだな。論より証拠なもんで、先にやってみたのよな。…俺も時間ないしそろそろお暇したいんだけど…」

「待て待て待て！どうやったら戻るんだよ！？」

さあ？一晩ぐらい経てば戻るんじゃないやねえ？的な捨て台詞とともに、いつのまにか男は消えていた。

「てきとうすぎるだろ……」

雪人は茫然とする。

とりあえず時間経過とともにこの効果は消えるようだが、それまではどうしてだろうか。

その時である。

「雪人さん、着替え終わりましたか？」

「あ、ちよ」

一刻の猶予も与えない初春のカーテン引きが、彼…今は彼女の思考を阻害した。

ここらへんは空気となっていたが、きちんと彼女を同行していたのである。

「えつと、あ…間違えました、すみません」

「ちよつ、待つて！俺だ雪人だ！」

対する初春は小首をかしげて、

「雪人さんは男ですよ？」

「いや確かにそうだけどええとその実は違って……………ええと……………」

…い、妹です！彼の！」

やべえやつちまったー！と内心で頭を抱える雪人。

「妹…ですか」

ほら疑いの目を向けられてるしーっ！と、もう内心顔ドラム状態になる雪人。

だが。

「じゃあうちに来ますか？多分お兄さん、先に帰っちゃってますよ」

「え……、疑わないの？」

「なんで雪人さんの身内を疑うんですか？」

……、やっぱりかなわないな、とこれまた内心、雪人は苦笑する。

例え雪人がレベル4を圧倒し、数多くの罪なき人々を葬ったとしても、初春飾利だけにはかなわない。

「ところで……お名前はなんていうんですか？」

「え、ええと、夏野……ユキ」

第十四話 教皇代理（後書き）

6月って忙しいですね……。

## 第十五話 性別転換（前書き）

前回より多少時間がかかってしまいました。

## 第十五話 性別転換

大覇星祭。

九月十九日から七日間続く、学園都市の宣伝も兼ねた体育祭である。しかし超能力開発をしている学園都市の宣伝イコール超能力使用の推奨なので、毎回ケガ人続出しかも観客までもが「もっとやれ」という雰囲気醸し出すという、微妙にクレイジーな行事だ。

「って事なんですよ。ご理解いただけましたか？」

「まあ、一応……」

初春の寮への帰り道。

雪人もといユキは、まさか自分はケガしないよな競技に出ないし、とか思ったが、なんとなくその予想というか願望はずれそうで怖い。

というか、今それを初めて聞いた。

「大覇制際中も風紀委員の仕事ってあるの？」

「ええ、一応見回りはしますけど……基本は警備員がメインで動くんですけどね。何か大きな事件でも起こらない限りほとんど仕事はなさそうです」

笑顔で言う初春。

その笑顔は、雪人と一緒にいる時間が増えるからだろうか。それとも。

すると、雑談をする二人の前に、一人の大男が立ちふさがった。

いかにもガラの悪そうな男は、コピー用紙をはきだすような口調でこう言う。

「いきなり悪いが……夏野雪人というやつを知らないか」

その瞬間、ユキは思った。

(またこんなのかあああああああああああつ!!!)

つくづく自分は不良っぽい輩と縁があるらしい。とりあえず相手の観察をするユキ。今の自分では強引な手は使えないかもしれないので、スキあらば逃げようと画策する。

(いや、今は俺は女。雪人というあからさまに男の名前なのにお前だなとか言われるはずが)「お前だな」(つてなんでーっ!?)

「……最近の子供に変な名前をつける親とかもいるからな。まさか女とは思わなかったが」

男はギロリとユキを見つめる。

身構え、少なくとも初春は逃がそうと思っていたユキは、虚をつかれた。

男が、急に頭を下げたのだ。

「え……?」

「この間は、俺の部下が勝手な事をしてしまったな。これくらいで勘弁してくれるとありがたいが、どうしてもというなら、金ならいくらがあるから、それを持っていってくれ」

「あの…あなたは…?」

初春がおずおずと尋ねると、

「……駒場利徳。スキルアウトの実質的なリーダーだ」

男は頭を下げたまま答えた。

スキルアウト。

武装無能力者集団。

なんだかんだで大規模になりつつある存在だ。しかし無能力者が学園都市の学生の6割を占めるといふ数字を考えると、その傾向にも納得がいく。

しかし『夜の街などで無能力者がかたまっで行動している』集団も問答無用でスキルアウトと呼ばれる事もあるので、実際に家にも帰

らない不良グループといえるのは、全体の1%ほどだと言われている。

かつてユキは彼らの一部と関わり、

(そういえば、あの翼……)

何かが、起こった。

その組織のリーダーである駒場は、その事について謝りにきたらしい。恐らく、元来彼は争いを好まない性格なのだろう。

「……今まで何も言えなかったのも謝ろう。何しろ、大したヒントがなかったものでな」

「駒場さん……」

「で、本題はなんだよ？」

ユキはてつきり頼みごとでもされるかと思い、強気にでたのだが、  
「……いや、それだけなのだが……」  
と返された。

「え？」

「……キミが許してくれるならもう俺が言う事はない。せいぜい今後俺たちのようなくでもない輩と出会わないように祈る、ぐらいの事だけだ」

駒場は、そのまま去っていった。

なぜだろう。

その背中が、ひどくやつれて見えた。

「あれ？雪人さん、まだ帰ってきてないみたいですね。どうします？」

玄関前で、初春はカバンから鍵を探りながら言った。

で、当の彼女は、

(なりゆきでここまで来ちゃったけど、どうしよう……あのツンツン頭は一晚経てば戻るって言ってたけど、それまでどんな感じで女のフリすれば……ッ!!)

世の中には星の数だけ悩みがあるが、こんな悩みを持っているのはおそらく世界中を探しても彼女一人だろう。

「あ、一応待ちますか？上がっていいですよ」

と、にこやかに振り向く初春。その優しさが、今はすごくこわかった。

「う、うん、そうだね……」

とユキも靴を脱ぐ。どうやら足のサイズも若干縮んでいるようだったが、不思議とゆるい感じはしなかった。恐らく何かの力がはたらいたのだろう。しかし服はぶかぶかなのは誰かの悪意もしくは邪念を感じる。

「あ、なんか電話が……」

とユキはみえみえの嘘をついて初春から隠れる。

(さて、これからどう動くか)

性転換というかなり奇妙な体験をしているにもかかわらず、彼女の頭は冷静を取り戻しつつあった。

(問題はこれだな。)

と、ユキは首から安っぽいヒモでつながれた『レイジアース』を取り出す。ちなみにそのカードはずっとパーカーの中につっこんであったのであった。レイジアース、羨ましい。

(今はなんともないようだが、これを外した瞬間なにが起こるか分からない。やはり一晚様子をみて、それでも戻らなかつたら行動にでる。つまり、こいつを外す)

「あ、お電話済みでしたか？」

ひよっこり初春が顔をのぞかせる。ユキは「お兄ちゃん、今日は所用があつて帰れないみたい」的な言葉を返す。

しかし、自分を「お兄ちゃん」と呼ぶのはかなり危ない気がするが、そこは気にしたら負けであろう。

「それにしても、もう九月も半ばだというのに、暑いですねえ」  
そこで初春は予想外の行動にでた。  
着ていたセーラー服に手を掛けたかと思うと、おもむろにそれを脱ぎ始めたのだ。

「……………え？」

良く確認すると、初春とユキは脱衣所にいた。

どうも、初春は着替えもしくはシャワーへ移ろうとしているらしい。

「あ、ユキさんも入ります？もう沸かしてありますよ」

外を見ると、もう日は傾いている。おそらく今日はもう外に出ないので、風呂に入ってしまったおうという魂胆らしい。作者もよくやる誰得？

「あ、いやいやいや俺…私は、別に……………てか今日初めてであった人と一緒にいるなんて……………」

慌てて言いわけするユキだったが、

「でも雪人さんの兄妹ですし」

と言いきられ、何も言えなくなる。

そのまま流れて二人は風呂場へ行こうとして……………

「あれ？それって……………」

初春が、ユキの首にかけられた『レイジース』に気がついた。しかし、今は裏返してあるので何のカードかは分からなくなっている。なので、

初春がそのカードが何か確かめようとしたのは当然だろう。

「…ッ！！？？」

スリーブからカードが外れた瞬間、ユキは男に戻っていた。戻ったのは良い。

ただ、この時二人は全裸だったので……………

(まさか、スリーブからはずせば戻るとはな…盲点だった)  
部屋の片隅で、雪人は考える。この分だと、時間経過とともに戻るわけではなさそうだった。

(まあ、今はとりあえず、)  
彼の頬は腫れている。

とある少女から鋭いのを貰ったからだ。

(初春に謝るか。…俺のせいじゃないけどな。あのツンツン頭、  
今度会ったらブン殴ってやる)

少年はゆっくりと立ち上がる。

少女との、暖かい日常の続きを歩むために。

カレンダーは、九月十五日を示している。

学園都市の大イベントである『大覇制祭』まで、あと四日。



## 第十五話 性別転換（後書き）

最後のほうの初春さんは超無理やりです。

今後は自嘲します……

そしてテストが近いorz

第十六話 未元物質（ダークマター）（前書き）

おひさしぶりです。

ちよつと期末試験がありました（現在進行形）、遅れてしまいました。

とりあえず次話は、試験が終わるまで待つていただきたくです。

## 第十六話 未元物質（ダークマター）

目が覚めたら垣根帝督になっていた。

理屈も理由も不明。ただ、それだけだった。

「……………は？」

微妙に開いたカーテンからは、わずかに朝日が漏れている。まるでホテルのような一室で、少年の間の抜けた声がかすれる。

「な、んだ……………こりゃ」

『少年』は、昨日までは普通の高校生をやっていた。アニメに詳しくなかったから若干オタク扱いはされていたものの、特にいじめなどはなかったはずだ。身長はねらったように平均ド真ん中。成績に至っても同じ。親しい友達も何人かいた。部活や委員会つながりで、女友達もいた。運動はどちらかといえば苦手だった。

そして、その『自分』の事を過去形で語る誰か。

それが、高級そうな洗面台の上の鏡に映し出されていた。

「『未元物質』……………ッ!？」  
なぜだ。

なぜ、自分が、良く読んでいた『とある』シリーズのキャラクターになっっている？

「……………確かに、超能力が身についたらどんなに便利か、とか、話してて盛り上がった事はある」

染めたのか元からなのか、茶髪の少年は言う。

「でも、なんでだ」  
整った顔だが、歪む。

「なんで……………あいつらの名前、思い出せないんだよ……………」

休日には一緒に遊び、学校ではバカ騒ぎをし、誕生日だって祝いあ

った事のある友達の名。

それが、霞がかかったように不鮮明になっていく。そして。

「なんで、俺の名前も、思いだせない」

十六年間その名で呼ばれ続け、幾度となくテストの答案に、作文用紙の端つこに、重要な書類に何度も何度も書き続けた、『少年』の本来の名前。

それも、分からなくなっていく。

「！そうだ、学校行かないと……！」

この状況から逃げるように、『少年』は、足を動かす。と、それが唐突に止まる。

なぜ、学校なんて行くんだ？

『垣根帝督』は、学校なんて行かないじゃないか。

「……」

彼はしばらく茫然と立ち尽くしていたかと思うと、部屋のベッドの倒れこんだ。

『垣根帝督』は考える。

今日は午後に『仕事』が入ってたから、まだ寝てて大丈夫だな、と。

『少年』は知る由もなかった。

彼の頭から……『とある魔術の禁書目録』の情報だけが消え去っていない事に。

「……もう午後か」

『少年』が時計を見ると、その針は午後一時半を指していた。と同時に、部屋の端にあった電話が3コール鳴って、止まる。

「仕事か」

もう自分が垣根である事に違和感を感じなくなっていた。

ただ、自分が別の世界からやってきて垣根帝督になったのは覚えて  
いるし、『とある』シリーズの知識も忘れてはいない。どうやら強  
引な『適応』にも限度があるようだ。

「まあ、裏世界を生き残るのにはちょうどいいよな、その知識」  
『少年』はそついい、部屋を出る。  
仕事だ。

垣根は、さびれた廃倉庫を見上げていた。

どうやら、敵は数十人の、しかも高位の能力者の集団らしい。

学園都市のトップである統括理事会にケンカを売ったとかで、彼に  
仕事が回って来たのだ。

垣根は彼らの事など知らない。

知る必要がないからだ。

「……面倒くせえ」

瞬間、廃倉庫が消滅した。

原因は明確。

垣根の能力である、『未元物質』。

その一撃で、軽トラックなら軽く百台は収納できそうなサイズの建  
物が木端微塵に吹き飛んだのだ。

「面倒くせえ」

しばらく経つと、粉塵の中から人影が見え始めた。

数人ではない。二十人はいた。

そんな大人数が、不意打ちの『未元物質』を喰らい、呼吸をしてい  
る。

「あー面倒くせえ。なんで俺が、230万人の2番目が、こんな雑魚の相手しなきゃいけないんだよ」

話しながら、垣根は2番目ってなんか格好悪いな、じゃあ第一位をブツ殺すか、いや原作だと負けてたしな、と思う。

思うだけの余裕ができていたのだ。

「はあっ……はっ……馬鹿な、第二位、だと……!?」

「ん？」

ふと彼が目をやると、満身創痍の能力者たちが垣根を見て、おののいていた。

垣根からは『少年』だったころの記憶はほぼさっぱり消えていたが、多分今まで、これほどまでに『殺意』というものを込められた視線を向けられた事は無かったような気がする。

それを考えた上で、彼は言う。

「……悪くねえ」

肯定した。

闇を、悪を、受け入れる。

どこか、不快な何かがふつきれたような爽快感を、彼は得る。

「ちくしょう……！いくぞお前ら、こうなったらどのみち殺されるだけだ!!」

能力者たちの一人の叫び声に、ほかの能力者が呼応する。

炎、雷あるいは氷などを生み出して襲いかかってくる、眼、眼、眼。その全てが、垣根帝督を怒り、憎しみ、今にも殺そうと迫ってくる。

「いい眼だ」

その瞬間、垣根帝督の背中から六枚の白い翼が飛び出した。

異空間から直接引っ張りだしてきたようなそれは、襲いくる能力者を全てなぎ倒し、あたりに鮮血の海を作った。

彼は取り出した携帯電話の向かって言う。

「ゴミ掃除の時間だ」

そうやって悪に染まった『少年』には、一つ気にかかる事があった。『グループ』『スクール』『アイテム』『ブロック』『メンバー』。彼の知る五つの暗部組織のほかに、原作を読破した彼でさえ知らない組織があったのだ。

その名は『システム』。

いつか調べてみようと、彼は思った。

第十六話 未元物質（ダークマター）（後書き）

第十七話 大覇星祭（前書き）

おひさしぶりです。

ずっと今季何を見るかを決めてまして……

## 第十七話 大覇星祭

学園都市の空には威勢のいい音とともに、途切れなく銃声や花火が打ちあがっている。

地上もたくさんの私服の父兄たちが埋め尽くして、そこら中の道が満員電車のように混雑している。

大覇星際。

学園都市の、PRイベントともいえる行事が、始まっていた。

そんなわけで、どこもかしこも体育祭ムードに包まれているのだが。

(なぜだ……)

ただ、夏野雪人の立っているところだけには、それが適用されないように、

(なんで、こんなに蒸し暑いんだ……ッ!)

気温四十二度、湿度八十八パーセントという、埼玉県熊谷市のような地獄を醸し出していた。

なぜなら、彼らがいるところは熱気のコもった体育館。

病院にて治療中の白井などの例外を除く第七学区の風紀委員が、この換気の乏しい空間に閉じ込められているのだ。

もともと雪人は暑さが苦手で、逆に寒さにめつきり強い。

だが、今はそんな事より、後ろの少女の方が気になる。初春は熱中症とかになってないだろうか。

彼は振り向きたくて仕方がないのだが、目の前の壇上で延々と話を続けるこの学校の校長らしき中年男性に見とがめられてしまうだろう。

これは風紀委員の集会なのだ。風紀委員でもない雪人の存在がばれられません。

(やっぱ一人でまわれれば良かったか)

頭の中でそう考え、直後に彼は否定する。

初春飾利は彼の恩人である。その恩人が「風紀委員の仕事を手伝いつつ一緒に大覇星祭をまわってくれ」と言ったのだから、彼は断るなんてできなかった。

なぜこんな集会に出ているかというのと、大覇星祭からは風紀委員の肩章が更新されるらしく、その配布と大雑把な説明のためだ。なんでも、古い肩章では、意味をなさないらしい。そこらへんはよくわかんねえな、と風紀委員(手伝い)は思う。先生に言えば普通に肩章くらいくれるんじゃないかと尋ねると、彼の同居人は「不審人物が風紀委員の権限を持つてうるちよるするのはまずいという理由で、部外者は絶対に手に入らない」らしい。

それでも雪人と仕事をしたかったのか。ばれた時のリスクを背負ってでも。

果たして自分は、本当にそれほどの価値があるのだろうか。今まで散々人を殺してきた、この悪魔を。

(そういえば大覇星祭中は、ろくに風紀委員の仕事がないって言うてたが……こんな集会を開くなんて、何か事件でもあったのか?)  
雪人の心の声に答えるように、中年男性はマイク越しに言う。

「今日、みなさんに集まって貰ったのはほかでもない。最近連続で犯行が確認されている事件……通称、『リア充爆発事件』の対処についてです。」

頭を抱えなくなったが、前述の諸事情により、できなかった雪人である。

リア充。

説明するまでもなく、リアル（現実）が充実してる人のことである。ちなみにどつからがリア充なのかは個人差があるよな、と某餅は思ったがそれは関係ないことである。

「あの、先生。もう一回言って貰っていいですか？」

「『リア充爆発事件』です」

その言葉に、体育館中がざわめき始めた。無理もないだろう、「真剣な話がある」と言われてクソ熱い体育館のスタンバイしてたというのに、リア充ときたもんだ。

だが、一人だけ冷静な者がいた。

雪人の後ろ、初春である。

彼女は雪人をかばうように前に出ると、こういった。

「先生、リア充うんぬんはともかくとして、『爆発』って……？」

その一言で、体育館が静かになる。

「はい。実際、リア充……：そうですね、具体的に言うると恋人同士で行動している若者ばかりを狙う、爆発物を使った犯行だ。能力なのか爆弾を使っているのかすら解析できていない。未だ死傷者はでていないが、それも時間の問題でしょう。だから我々は手を打ちたい分かりますね？」

敬語とタメ口を混同させてしゃべる教師は続けた。

さきほどまでの喧騒がうそのように、体育館が静まり返る。

「実質的な警備は警備員アンチスキルに任せますが、見回りは君たちがやってくれ。不審なものを見たら即連絡する事。それでは解散」

そのころ学園都市のどこかで、別の人間が動いていた。

オリアナ・トムソンと、リドヴィア・ロレンツェッティ。

科学と魔術が交差する時、物語は始まる。



第十七話 大霸王祭（後書き）

それっぽいオチで締めてますが、例の事件の犯人はお姉さんたちじゃありませんからねっ！次回に続きます。

日常の新OP、悪くない

わらびもち

第十八話 爆発&爆乳(前書き)

お久しぶりですという前がきかもつ定番になりつつありますね……  
orz

## 第十八話 爆発&爆乳

「さて、と……私たちの担当はこのあたりですね」

「ああ。……しかし、あの先生、もっと詳しく説明できなかったのか？」

「仕方ないですよ。本当に何もつかめてないんですから」

なんだかんだで大覇星祭中は忙しくなりそうだ。しかし理由が理由であるため、あまり危機感を抱いていない二人である。

「しっかし……」

二人は次々に花火が打ち出されている空を見上げて、

「涼しいな」

「涼しいですね」

夏から秋へと雲の種類が変わって行く日本の大気を目いっぱい吸い込む。体育館を出た時にはすでに汗びっちょりだったので、着替えた。ちなみにこの一週間は、指定のポイントで体育着を無料で貸し出しているの、着替えには困らないのだ。つくづく便利だなあと、雪人は思う。

「あ、あの、雪人さん」

「ん？」

彼が振り向くと、初春が屋台を指さしていた。少し頬を朱に染め、それでもしっかりと言う。

「あれ、食べませんか？」

「……職務中じゃないのか」

言いながら、初春もやっぱり中学生なんだな、と思う。

仕方がない、ここはオトナな高校生（くらいの年）の自分が説得しとやろう、と決める。

「あのな、今は事件が起きてるんだぞ？下手すると人が怪我するか

もしれないんだ、買い食いなんてしちゃダメだろ」

「うう、でも、私は雪人さんと大覇星祭を回りたくて……風紀委員の仕事がいっぱい入っちゃったけど、絶対に回りたくて、それで雪人さんを無理やり手伝わせちゃって……」

初春のセリフはしりすぼみになって全然聞こえなかったが、とりあえずオトナとして説得を続けようとして、

見た。

なんか初春の指の先に、アイスクリームの屋台がある。

記憶喪失の雪人だが、自身について分かった事はいくつつかある。

その一つは、自分はアイスが大好きだという事だ。

「よし初春アイス食べよう」

「わあ……!!」

これでもかというぐらい二人の顔がシャイニングし始めた。

もはやオトナとしての威厳とかその他諸々を全て科殴り捨てて、一直線に屋台へと向かう二人だが……

「!!!」

かつて白井の空間移動を事前に察知したのと同じ、反射的に雪人は振り返る。

そこには。

『スクール』の超能力者、垣根帝督（に、手違いでなってしまった少年）は、そんな“表”とは切り離された場所にいた。

「『システム』か」

学園都市がどんなことを考えているのかは知らない。

しかし、今の垣根には、ヤツらが皮肉っていると思っただけがなか

った。

なぜなら。

今回の彼に与えられた任務は、

その『システム』のリーダーの抹殺なのだから。

「さて……心理定規<sup>メジャーハート</sup>、お前の出る幕はなさそうだな」

「あら、私の分までやってくれるの？」

「おう。だからエロい事してくれよ」

「ふふ、後でね」

雪人が振り返った先にいたのは、果たして白井だった。

「……なんだお前か」

敵かと思っていたのに、なんだか拍子抜けしてしまう。

「その反応はなんですか？というか、初春？ 仕事中に買い食いとは、何を考えているんですの？」

白井は笑顔だが、彼女の後ろから主に『怒』を基調としたオーラがにじみ出ているのが見える。幻視である事を願いたい。

そもそも白井は入院しているはずで、外出許可を貰ったにしても能力の使用はドクターストップがかけられている……と、思いたい。

しかしここでの話、原作で普通に使っていた。何より。

手の中で金属矢を弄んでいる女子中学生というのは、とても怖い。

「いや待ってくれ白井。初春は悪くな」

「ええそうでしょうね。悪いのはあなたたち二人ともですの。よりによって買い食いをほのめかすだなんて。年長者として、何かありませんの？ ほら威厳とか」

「ぐっ……」

こうなつてしまつてはぐうの音も出ない。いや今出ちゃつたけど。かくして彼ら二人は、小一時間後に初春の「御坂さんにナース服で看護されたくありませんか？」という一言が発せられるまで縛られる事になつた。もはや買ひ食いより白井の説教のほうが時間がかかつているという始末であつた。

初春と並んで歩き、白井が虚空へと消えた跡を思い出しがら、雪人は言つた。

「年下の女つてよくわかんねえ……」  
それを聞いた初春が何か言おうとした、その時。

ばふん、と。

雪人の視界が、何やら柔らかいものでふさがれた。

「？」

驚きよりも、疑問が先行した。

視界をふさいでいる何かを探るべく、彼は両手を前に出して、その柔らかいものを、  
掴んでみる。

初春が、小さい悲鳴のようなものをあげた。

「？」

数秒の後、ようやくそのブツから頭をすっぽ抜き、改めて前を見た雪人の前に、いた。

困ったような顔で立ち尽くす、金髪で作業服を着た、とにかく巨乳のお姉さんが。

## 第十八話 爆発&爆乳（後書き）

タイトルミスった……爆発してないし。

さて、決闘世界はこれからアツくなっていく予定です。

夏野雪人、そして垣根帝督もとい『少年』というイレギュラーの加わった禁書はさらなる展開に！

大覇星祭で何が起こるのか……科学と魔術が交差する時、物語は始まる。

ちよっとかっこよく締めてみましたw

第十九話 余波がもたらすもの1（前書き）

お久しぶりです。

……すみません

## 第十九話 余波がもたらすもの 1

雪人は十数秒たってようやく状況を理解した。  
うずめる形になってしまっていたのだ。

目の前の金髪お姉さんの、胸に。

「あ……えっと……」

やばい。

気まずい。

しかし、そんな雪人にかけられた声は、

「ああ、別にいいわ、気にしないで」

という、めつちや流暢な日本語だった。

「ど、どうもすみません」

とりあえず謝っておく。

雪人は安心した。気まずくなくなっている。

よし、向こうも気にしてないようだし、てきとうに挨拶して別れよう。

そう思っていた雪人が次のイベントに対してとっさにまともな反応出来なかったのは必然だろう。

なぜなら。

お姉さんが。

「もっと『遊び』たいならホテルに行ってもいいけど……今お姉さん急いでるの、ゴメンね」

と、耳元で囁いてきたからだ。

「っ!?!」

当然、純情少年でもある雪人はガッチガチに固まってしまふ。

初春飾利は湧き上がる感情を抑えていた。彼女自身には理解・制御できていないその感情は、渦を巻くように彼女の中を流れていく。

なぜだろう、と思う。

同居している少年が、ナイスバディのお姉さんに甘い息を吹きかけられて真っ赤になっているのを見ると。

イライラ、というか。

どうも、気分が悪い。

オリアナ「トムソンは少年の後ろで固まっている少女を見て、困ったような笑みを浮かべた。

（ちよっと、やりすぎちゃったかしら）

まただ。

こういう純情少年のうるたえぶりを見るのは楽しいし、うるたえる少年のほうも本気で嫌がったりしないだろう。なにせ思春期の男なのだから。

でも、その少女は快く思っていないようだ。

彼女の人生、こんなのばかりだ。

よかれと思ってしたのに、それが悪い事にばかり繋がる。

だからオリアナはそれを終わらせる。

相棒とともに。

（まあ、今はとりあえず……）

「ごめんなさいね。お姉さんったら節操なしで」

そつと少女の耳に囁く。

「あなたのこと、応援してるわ」

そして、オリアナ・トムソンは去った。

雑踏の中にまぎれるように。

「ここか」

垣根帝督は『システム』の隠れ家に来ていた。

こちらの居場所は割と簡単に調べる事ができた。

だが、『システム』の機密度は『スクール』と同じなので、『スクール』の隠れ家もあちらにはばれているという事になる。第二位とはいえ、無敵ではない。一応警戒して久しぶりに学生寮に戻ってみるか、と垣根は漠然と考える。学生寮に行った事があるのはたった数回で、もちろん学校には足を運んだ事すらない。

「……チツ、遅かったか」

『未元物質』を使い強引に戸を開ける（ぶち破る）と、そこはもぬけの殻だった。

ただ一つ、リビングの中央に大きなソファが置いてある。

不審に思いながらも彼は、そのソファに座って考える。

（確かに俺は禁書目録の世界にいるハズだ。だが、だったらなぜ『システム』なんて組織がある？……何かがおかしい。どこかでネジが狂っちゃったのか？）

彼の思考は長くは続かなかった。

なぜなら。

垣根の座っていたソファが、何の前触れもなく爆発したからだ。

爆発の余波は数重メートルにも及んだ。  
しかしここは比較的人口の少ないところで、一般開放もされてないので、奇跡的に被害者はいなかった。  
そう、一人も。

「ハッ、宣戦布告のつもりか？第二位もずいぶんなめられたもんだな」

無傷の垣根帝督は歩いていく。

その一步一步が、『システム』の連中の寿命だった。  
そして、彼は既にその最後の一步を踏み込んでいる。

「だったら、こっちからも宣戦布告だ」

『未元物質』によって生成された透明の槍が、『システム』のいるであろう建物を撃ち抜いた。

これほどの被害があっても、誰も騒がない。

事前に『スクール』の権限を使い、周囲の人々を遠ざけていたのだ。  
「まあ、爆弾仕掛けるなんて雑用を引きつけるやつなんて、どうせ下っ端だろ。さて、次は……」

垣根は他のメンバーがいるであろうビルを見る。  
だが、この時点で彼は間違えていた。

『システム』に、下っ端などいないのだ。

青白い光線が、垣根を狙って撃ち出される。

その不健康な色をした光は、○・○三秒後にアスファルトごと少年

を吹き飛ばす。

「痛ってえな」

それでも、垣根は無傷だった。

彼の全身を守るように展開された白い翼は、青い光線を全て弾いていた。

彼は襲撃者をジロリと睨む。

そいつは慌ててビルの影に隠れたが、少年の対応はシンプルだった。白い翼を軽く、振る。

それだけでビルは粉々に吹き飛び、あたりには鉄の臭いが充満した。

「……まあ、死んではいないだろ。致命傷ではあるがな」

垣根は再びまわりを見回す。

「で、なんなんだお前らは？まさかさっきのがリーダーで、敵討ちに来ましたー、じゃねえよな？ありえねえか。弱過ぎだったし」

光線の出力からするに、さっきの襲撃者はほぼ超能力級の能力者だったはずだが、それを軽くあしらえるのが第二位である。

垣根の見つめる先には、二人の男女がいた。その視線を受けて、彼は笑みを浮かべる。

なぜなら、垣根に向けられたのは、彼が肯定した“殺意”なのだから。

ハッと、夏野雪人は我にかえた。

どうも、呆けていたらしい。

くそ恥ずかしいな、と思いつつ雪人は振り返る。

「悪かった初春、俺……って、あれ」

右を見る。

左を見る。

後ろを見る。

「初春？」

少女の姿は、どこにもなかった。

そして、その少年を物陰から見つめる人物がひとり。

そいつは、うろたえる雪人を見て……………

狩人の笑みを、浮かべた。

第十九話 余波がもたらすもの1（後書き）

補足。

『システム』及びリア爆魔は完全オリキャラですね……出来る限り  
オリ要素は控えようと思っているのですが、話の展開上仕方ないん  
ですすいません……

第二十話 余波がもたらすもの2(前書き)

お久しぶりでry

## 第二十話 余波がもたらすもの2

初春飾利は、走る。

例え、通行人とぶつかっても、つまづいて転んでも、ひた走る。怪我をしても、全く構わなかった。

それで、少年と少しでも離れられるなら。

『あなたのこと、応援してるわ』

あの金髪が去り際に言ったセリフが頭の中で反響する。

彼女が何を応援してくれるのかは、知らない。できるなら、知りたくない。

もし初春が大人だったら、きちんと感情の制御ができるだろう。

だが、まだ彼女は子供だった。中学生だった。

自分の中にあるものが何かすら分かっていない、お子様にすぎなかった。

息切れを起こし、立ち止まる。

そして初めて、自分の双眸から涙があふれているのに気付いた。

初春からすれば、なんで泣いているのかすら分からない。

この世界は……子供には分からない事だらけだ。

「おや？どうしたんだい、君？」

俯いている初春に、声がかけられた。

顔をあげると、そこには二人の男女がいた。

「あらあら刀夜さん、今度は中学生に手を出すんですか？」

「え？いやいやそうじゃないよ母さん！」

確かに、この世界は、子供には分からない事ばかりだ。

そう、子供には。

「さて、暇潰しにはなってくれよ？」

垣根帝督はそう言っつて、能力を展開した。

白い翼が、メキメキと音を立てて肥大化する。

そのまま翼が男女のいたところを直撃した。安否を確認しようにも、粉塵が邪魔でできない。

おや、もしかして死んだかな、と思う垣根だったが、すぐに、その考えを撤回する。

なぜなら、男のほうに垣根に突っ込んできたからだ。

「ハッ、単純な直線攻撃で『未元物質』に勝てるっても……！」

しかし、彼の余裕はいつまでも続かなかった。

男が走る速さ。

それが、とてつもなく速い。

「チツ……！」

垣根は舌打ちして、上空へ舞い上がる。男のほうに何かをしたのか、さっきまで彼が立っていた場所が爆発する。

「っ、……！」

今度は女のほうに垣根の上空に現れた。大きなマグナム拳銃を構えている。

（空間移動能力者……！）

とっさに垣根は翼を動かし、女を貫こうとするが、向こうの方が早かった。

音すら残さず、その姿が消える。

ただし、残ったものならあった。

ピンを抜かれた、手榴弾だ。

ドゴォ……！と空中で爆発が起こる。

だがそれでも、垣根は無傷。

（コイツら……戦い慣れて……っ……！）

そして一瞬の後、男のほうに垣根に迫っていた。

解釈に間違いのないように言っておくが、垣根はまだ空を飛んでいる。

つまり、飛んできた。

「こつちとしては男と顔を合わせるのすら嫌なんだからさ、とつととつぶれてくんない？」

そう言い、男は得物……垣根の身長より大きな鉄パイプを振りおろす。

ゴツキイン！！という音が響く。

鉄パイプを、『未元物質』が弾いた音だった。だが、垣根は舌打ちをする。

なぜなら、男は弾かれたエネルギーを利用して、地面に着地したからだ。

垣根と違い、男のほうは滞空手段を持たない。

だから、地面と空を行き来して戦うつもりなのだろう。

まるで、熟練の戦士のような戦い方だった。

垣根はその連携プレイの効率の良さから一人ずつ潰していこうと思つて

次の瞬間、

何束もの青白い光線が垣根に襲いかかった。

「……ッ……ッ……ッ……」

とつさに翼で身を守った垣根だが、一瞬、隙が生まれた。そして、熟練の戦士はその隙を逃さない。

「ほおら、ボディが留守だぞクソ野郎おおおっ……ッ……ッ……」

叫んだのは女のほうだ。どうやら見た目とは裏腹に、言葉づかいは乱暴なようである。

垣根は避けたが、左肩に裂傷が刻まれた。

（っ、この攻撃はどう考えても能力！？だが、能力者が扱える能力は脳容量が足りないために常に一つであるはず。コイツはさっき空間

移動を使った。だから空間移動能力者でないとおかしいのに……ッ  
！！）

「ハッ、確かにオレ様は空間移動を使った。さっきは風の攻撃を行  
った」

今度は垣根の心を読み、女は笑みを浮かべる。

ブチリと、何かを引き裂いたような笑みを。

「だからなんだ？ たったそれだけの事じゃねえか。オレ様だけじゃ  
ねえ、もいかれてやがるぜ。全く、おもしろえよな」

女はまた『能力』を使い、空中に足場を形成し、その上に優雅に立  
つ。

「まさか……テメエ！！」

「そうだよ。数か月前に木山春生が起こした『幻想御手』事件で彼  
女が使った『多才能力』……それに似ているようで、全く違う。あ  
んなまがい物と一緒にすんじゃねえ！！オレ様の能力は真正正銘の  
『多重能力』だ！！」

「んだと。もう一度言ってみろ！脳容量の不足が原因で、一人に二  
つ以上の能力が宿る事はねえだろうが！！」

「お前、相当のバカだな」

序列第二位の男に向かって、女は鼻で笑う。

「だったら、脳に細工すればいいんだよ。まあ、『魔術』つつつて  
も、科学の徒には分かんねえだろうがな！！」

「……なん、だと？」

今度こそ。

今度こそ、垣根は驚愕する。

異世界から憑依してきた『少年』だからこそ分かるが、『魔術』は  
科学サイドでは隠匿されているはずだ。おおっぴらになっていない  
あたり、それを知っているのは『システム』だけのようだが、それ  
を堂々と言い切るあたり、

（俺の知っている禁書との“ゆがみ”が広がりつつあるっていう事  
か？）

「悪いがな、『システム』に科学の常識を当てはめようとする事は間違いなんだよ!!」

次の瞬間、女の作りだした風の刃が、男は振るう鉄パイプが、襲撃者は打ち出す青白い光線が、垣根に向かって襲いかかる。

「確かに、テメエらがどんな方法で『魔術』を使っているのかは知らない。そもそも、テメエらは『原作』には存在しないイレギュラーだしな。今何がどうなっているのか、第二位の俺ですら分かってねえのが現状だ。そんな俺には、断定できる事なんて一つしかねえよ……」

つまり、と垣根は呟いて、

「俺の『未元物質』に常識は通用しねえ、って事だ」

垣根の翼が高速で展開する。

それは風の刃を受け止め、鉄パイプを焼き焦がし、青い光線を弾き返した。

動揺する『システム』を前に、垣根は笑う。

何が『多重能力』だ。

何が『魔術を知っていて、何かしらの作用を受けている』だ。

それらが『システム』の常識なのだとしたら。

垣根帝督は、その『常識』を超越するだけだ。



## 第二十話 余波がもたらすもの2（後書き）

『システム』については結構登場させる予定があります。

設定が上手く伝えられたかどうか不安です……何か気になるところがございましたらお気軽に感想やらなんやらお願いします。

第二十一話 余波がもたらすもの3 (前書き)

誰か『お久しぶりです』に代わるあいさつを考えてくれませんかね

……

## 第二十一話 余波がもたらすもの3

雪人は雑踏をかきわけ、少女を探す。

「くそつ、どこ行きやがった……初春、初春っ!!」  
確かに金髪のお姉さんにうろたえたのは好ましくもないかもしれない。だからといって、急にいなくなる程ではないだろうに。会ったらイツパツ叱ってやろうと、雪人は思う。

一介の『オトナ』として。

「ふーん、そんな事がねえ」

公園のベンチに初春と、上条と名乗った夫婦は座っている。立ち話もなんだから、と促されたのだ。

「やっぱり学園都市って色々とぶっ飛んでるなあ」と言っただのは夫の方だ。

そしてそのまま促されるままに、初春は夫妻に事情を話したのだ。た。

雪人との出会いから、さっきの金髪お姉さんの件まで。

「あらあら……」

上条奥さまは上品に口に手を当て、少し驚いたようなしぐさを見せる。

ただそれは、上条夫とは違ったところに対してだ。

「……若いっていいわねえ」

「母さんも十分若いよ」

「あらあら刀夜さん、若干棒読みですよ？」

「え、いや、母さんは本当に若いしキレイだよ？だからその拳を下

ろしてくれませんか」

二人は争いを起こしているようであったが、良く見るとそれでさえ円満の象徴のように見てとれる。

こういうのが『夫婦』ってものなんだな、と、初春はふと思う。

そして故郷にいる両親を想う。彼らは元気にやっているだろうか。

「おつとすまんすまん。つい二人で話してしまっていたな。何せ二人でいる事が少ないんでね」

「え？上条さんはどんなお仕事をしてらっしゃるんですか？」

「世界中を回ってイロイロやるのさ。企業秘密だからそれ以上は教えられないけどね」

そう言った上条はどこか誇らしげだった。愛する人と二人でいる時間は少ないのに、それすらも自慢するように語る父親が、そこにはいた。

「奥さんと一緒にいれないのに、なんでそんな……」

「だからこそだよ」

その父親は、断言する。

「例え世界の端から端まで距離があつたとしても、決してちぎれる事はない事を知っているからさ」

それを聞いた時、思った。

この人たちは、格好いい。

本当の愛の形を知っているのだと。

同時に、羨望も感じた。将来は、こんな夫婦になりたい。

そう、自分は奥さんだとすると、愛する夫は - - - - -

- - - - -

「……ッ……!!」

考えると、また何故か涙が出てきた。

オロオロとろたえる上条父の肩を叩き、上条母は「代われ」と訴える。

夫と位置を交換し、初春の隣を陣取った母、上条詩菜は、言う。

「これまでの話を聞いて、分かった事が一つだけあるわ」

彼女は初春の頭をなでつつ、  
「貴女、本当に彼の事が好きなのね」

「そいや、今日の任務は『システム』のリーダーの抹殺だったな。いつまでも雑魚の相手はしてらんねえか」  
辺りは地獄のような惨状になっていた。  
半径百メートルの建物は例外なく倒壊し、みじめな瓦礫になり果ている。

しかしそれでも。

『システム』のメンバーは、生き残っていた。

垣根が手加減したのではない。

彼らが自力で、己の命を守ったのだ。

「丁度いい。じかにリーダーの居場所を聞き出せるしな」

垣根は倒れた女に歩み寄る。近くで見ると、女は茶髪だった。染めたのではなく、天然の色。その顔立ちも悪くない。口を開きさえしなければ、普通にモテそうな女だった。年も高校生くらいだ。

垣根が瓦礫を踏む音を聞くと、女は彼の方を向いて、言った。

「リーダーのクソ野郎なら、今頃第二十三学区で飛行機の手配でもしてるんじゃないか」

「あん？リーダーのくせに、逃げるのかよ。とんだ三下だな」

「まあ、仕方ねえんじゃない？アイツじゃ、どう考えてもテメエには勝てなそうだし」

リーダーを侮蔑するような口調だった。

「俺を止めないのか」

「止める義理はねえよ」

おかしい。

まるで、その『リーダー』とやらを使い捨ての道具としてで見  
てないような口ぶりである。

「あんなヤツでいいならいくらでも代えがきくしな。オレ様たちと  
違って」

そういうと、女は黙りこんだ。

早く行け、という事らしい。

「……」

多少気になるところはあったが、今はリーダーの殺害が優先だ。

垣根は翼で飛んだ方が速いと考え、それを展開しようとして、

三度、青白い光線が襲いかかる。

「……んだよ、せつかく人が空からの風景を楽しもうとしてんのに  
よ」

やはり、垣根は無傷だった。

その瞳に写し出されているのは、真黒いコートを着た少女だった。

年は十二歳くらい。大きめなコートと長い黒髪のせい、全身が黒  
く感じられる。

唯一白い顔にも、それを横断するように眼帯がかけられていた。

「バカ、やめろ……！！」また「死にかけるつもりか！！」

女が倒れたまま叫ぶが、少女は気にも留めない。

荒い息をつきながら、叫ぶ。

「あああああああああああああああああああああああああああ  
あああああっ！！」

その声に共感するように、いくつもの球体が現れる。

それは、眼だった。

何かで形成された、敵を睨む眼だった。

そしてバレーボールほどの大きさのそれらが青白く光ったかと思つ  
と、垣根の長身を貫かんばかりに撃ちだされる。

「なんだ、そんなカラクリかよ。つまんねえな」

だが、『未元物質』はそれを軽く弾いた。光線は鋭角を描いて、少女の足もとに突き刺さる。

ドバツ！とアスファルトが爆ぜる。

今度こそ。

少女の全身から鮮血が吹き出した。

不自然にけいれんするそれを再び見る事なく、垣根帝督は飛び去る。

「救護班を回せ。今すぐにだ」

ひしゃげた鉄パイプを放り捨てながら、男は言った。

それから携帯電話を仕舞い、かたわらに虫の息で転がる少女を見下ろす。

「……あいつのいない『システム』ってのは、こんなにもくそつたれだったとはな。もう笑うしかねえのか、この状況は？」

ゆっくり立ち上がった女が呟く。

「やめときなよ。内臓に一発もらってるじゃん」

「チツ。よく見てやがるぜ」

「女の子の観察ならお任せ」

「ああ、そうかよ」

あいかわらず軽い少年を軽くいなし、女は空を見上げる。

『システム』の本当のリーダーを思い出しながら。



そういい、上条夫妻は立ち上がる。

初春も立ちあがって、言った。

「あ、あの、ありがとうございました!」

「ふふ、どういたしまして」

「まだ気持ちの整理ができてないですけど……でも、もう何かから目を背けるのは、やめにしようと思います。時間がもったいないですから……もつと、雪人さんと一緒にいたいですから」

「がんばってね。応援してるわ」

そういわれ、初春は頭を下げた。

思い出してみると、あの金髪お姉さんにも『応援』された。

つまり、彼女も上条詩菜と同じ事を言ったのだらう。

初春は子供だ。

だから、説明されないと何も分からない。

今、やっと分かった。

そう、分かったのだ。

第二十一話 余波がもたらすもの3 (後書き)

上条夫妻KAKKEEEEEEEEEEEEE

と、自分で書いてて思いました。

きつと御坂夫婦も良い感じに信頼しあってるんだろっなあ……

第二十二話 余波がもたらすもの4（前書き）

ここらへんずっとサブタイトルがあんな感じになっている事にお気づきになられている方も多いハズ。

これはサブタが浮かばないのではなくて、諸々の事情があつての事なのです。

これはサブタが浮かばないからやったという処置ではございません。大事な事なので二回ry



「つく、あ、うおおあああああああつ！……！」

「いちいち叫ぶなよ、うつとうしい」

ゴリリッ！と濁った音が響く。

男はもう叫び過ぎて、のどが枯れていた。

「さて、あとはこの拳を叩きこめば終わりだが……お前に選択肢を与えてやる」

「え……？」

「『システム』の事だ。仮にもリーダーなんだ。色々知ってんだろ？」

垣根はサディスティックに笑う。彼は言外に言っていた。交渉しよう、と。

「『システム』の詳細を吐けよ。吐いた分だけ、死から遠ざかれるぜ？」

それは男にとって、願ってもない事だった。

「わ、わかった。言う、言うから……！」

そういうと、垣根は足をどけた。だが、白い翼が彼を狙い続けている。どうやら隙について逃げようという考えは潰されたようだ。

「えっと……まずはメンバーについて、でいいか」

「ああ。奴らが『魔術』を知っていたのは気になる」

「まじゆ……？まあいい。

多分それを使ってるんだろ？な。じゃないとあの理論を無視した戦闘力は生まれないだろう」

よく分からなかったので、垣根は傷口を小突いた。男が悲鳴をあげる。

「分かった、わかったから……！……あれだ、茶髪の女がいただろう？」

「ああ、あの『多重能力者』とか言ってたヤツだな」

「あいつは本来無能力者なんだ」

「……は？もつと面白い冗談を考えろよ。殺すぞ」

「ち、違う！本当だ！！多分その魔術とやらを使ったんだ！そうじ

やないと説明のしようがないだろう!？」  
魔術。

オカルト。

確かに科学サイドでは、『多重能力』は実現不可とされている。だとすれば、オカルトの領域まで踏み込まないとその理論無視のチカラは生まれまいだろう。実際、学園都市最強クラスの理論無視野郎の垣根でさえ、『多重能力』の発言はできなかった。

しかし、その話には一つ欠点がある。

超能力者に、魔術は使えない。

能力者は脳を日常的に開発されている……つまり『無理やり才能を開花させている』。対して、魔術は『才能のない者が才能ある者に追いつくために作り出したチカラ』。

脳の回路が決定的に違うため、無理に使うと深刻な拒絶反応が身体を襲うのだ。

だが魔術自体は使えずとも魔術の恩恵は受けられるため、彼女もそうなのだろう、と垣根は結論づける。

「じゃあ男の方は？やたら軽そうなヤツだ」

「あ、あいつの能力は何も知らない」

「あ？」

「ほ、ほんとうだ!!」

「嘘だな。少なくとも百メートルの高さまでひとつ飛びできる無能力者なんて聞いた事ねえぞ」

垣根はいらつき、男の顔を蹴飛ばす。

「あぐつ!……少なくとも、一年は能力を使っていない。これから使う予定はない。あいつがそう言ったんだ」

それはきつと、使う必要がないからだろう。垣根はそう考える。

「……また面倒臭いヤツだな」

「もう一人いただろう。小さいガキだ」

垣根はあの青白い光線を思い出しつつ答える。

「いたな、そんなのが」

「あのガキのチカラ……第二位の演算・解析能力があれば、おのずと分かって来ただろう」

「まあな。恐らくは温度を操ってる。攻撃に使うときにわざわざ光線に変換したってことは、何らかの事情があるな」

第三位の超電磁砲は、電気のスペシャリストだ。電気が絡む事なら、たいていの事はこなせる。

第四位の原子崩しは、電子を操る。第三位より応用は効きづらいが、それでも攻撃、回避、防御を使い分ける。

だが、彼女は違うらしい。

土を熱で固めた『眼』の形成と光線。

それだけ。

応用力がないのだ。

「ハッ、他の使い方もできれば『八人目』になれるかもしれねえな、もったいねえ」

垣根はそういつつつ、男に無言で催促する。もちろん、もう男から得られる情報はないと確信しての行動だった。気が向いたから遺言を聞いてやると。

「結局、あいつらは一体なんなのか……長い事下に付いてた俺でさえ分からなかった。」

ネタがなくなっても、男はしゃべり続ける。口を休ませれば死ぬからだ。

対して、垣根は目を見開く。

「お前……下に付いてただと？下部組織だったのか？リーダーじゃなくて」

「当たり前だろ！！」垣根帝督に殺されるためにリーダーになるか、それともここで殺されるか「なんて問われたら首を縦に振るしかない」

「どういう事だ？」

「もともと、『システム』のリーダーはとても強かったんだ」

男は呼吸を整えるように、言う。

「だけど……いつのまにか、そいつはいなくなってしまった。死んだのか、逃げたのかは分からん。その枠に俺が入った。それだけだ」  
「……」

垣根はまた考える。

彼の所属する『スクール』に限らず、『グループ』『アイテム』『ブロック』『メンバー』の正式メンバーはぴったり四人。

それは『システム』でも通用するようだ。

そして、この男が抜けても『システム』は、また別の雑魚をリーダーに据えるだろう。

「そいつは……悪魔のようなやつだった。どんな猛者でも……あいつの氷のような藍色の瞳を見ると、足がすくんで動けなくなっちまうんだ……俺は」

男は途端にガクガクと震えだす。

「俺は……」

「そうか」

垣根はそう呟いた。

『多重能力』の女、脅威的な運動能力を持つ男、『眼』を操る少女、そして……本当のリーダー。

普通なら、ここでそのチートさに慄くべきであろう。

「だが、俺の『未元物質』に常識は通用しねえ」

ゴリベキグリッ！と、耳をふさぎたくなるような音が響いた。

もとより、垣根の仕事は『システム』のリーダーの抹殺。

いくら情報を貰おうと、命を奪わないという選択肢ははなからなかったのである。

「さて……そろそろこの世界の『イレギュラー』を調べる下準備ができてきた」

序列第二位の男は不敵に笑う。

「アレイスター……お前は知ってんのか？その『イレギュラー』どものことをよ」

自身もそのカテゴリに含めたその台詞は、虚空にはじけて消えた。

碧色の双眸が、休みなしに辺りを見回す。

時刻は、午後四時。

焦る夏野雪人は、未だに初春を見つけられない。

そして、焦っているがゆえに、気付かない。

彼を後ろから尾ける、影に。

第二十二話 余波がもたらすもの4（後書き）

次回からまた前書きが「おひさしぶりです」になるんじゃないあ

……

第二十三話 余波がもたらすもの5（前書き）

前回の更新から何日経っているか、確認するのがイヤになってきた  
このごろです。

## 第二十三話 余波がもたらすもの5

「さて……」

上条夫妻と別れた初春は、とりあえず雪人を探すために立ち上がった。時刻はすでに五時を過ぎている。

昼食と一緒に食べようと思っていたが、結局うやむやになってしまった。

でも、大丈夫。

なぜなら、大覇星祭はあと六日もあるから。

『リア充爆発事件』なんてふざけた事件なんて関係ない。知った事ではない。

あと六日。

そこで、今日の埋め合わせをしよう。

「で、こんなに広い学園都市を風潰しに探すつもりだったの？」

「はい……」

まあ、東京の半分もの面積を持つ学園都市を走破は無理だったのだが。

俯く初春に、佐天涙子は呆れて言った。

「きつと夜には帰ってくるでしょ。それまで待ってなさい」

時刻は午後六時。

ナイトパレード、ひいては花火開始まで、あと三十分。

『リア充爆発事件』の犯人は、そんな初春を探す雪人の後ろをびったり尾けていた。

当然、彼は雪人の正体など知るよしもない。

「ナイトパレード、ね」

パンフレットを見ながら、雪人は呟いた。そのナイトパレードとやらでは、盛大に花火を打ちあげるといふ。

「……花火かあ。見てみたいなあ……じゃなくて！そうだ、初春を探さない」と

といいつつも、言うほどには初春を探す気が失せてきている雪人だった。

もちろん、それは初春に会いたくない訳では決してなく、

「ま、俺なんかが初春と一緒に花火なんて……」

ガラじゃない、などというレベルではない。

記憶こそ失っているが、雪人は真正銘の人殺しである。

依頼さえあればどんな事でも平然とやってのけていたクソ野郎なのだ。

そんな自分が、まっとうな人間である初春と一緒に花火？

だめだ。初春はこんなヤツの傍にいるべきではない。

……多分、心のどこかでずっとそう思ってきた。初春の部屋で目を覚ました、あの時から。

今、とうとうその思いが表面に出てきただけの事だ。

「まあ、初春とこ以外に寝泊まりできるとこ知らないしなあ……」  
ずっと厄介になるのもアレだし、いつかは出て行こうと雪人は決め

「あ、雪人さん！こっちですよ、こっち！！」

「……」

「あれ、どうしたんですか？」

まさかと思い目をやると、そのまさかだった。初春が駆けよってきている。心なしかその目元が赤く腫れていた。

「なんつうか、タイミングがいいなと……いや、いいのか？それとも悪いのか？」

「？」

「……まあいいか」

「あ、その雪人さん、その……」

「？」

「……クロス」

事件の犯人はそう呟いた。

やつらは、完全なるリア充である。

下した刑は、爆死刑。

もはや気配を消す事もなく、彼は彼らへと走る。

「あ、あのっ、雪人さん!!」

「だからなんだよ?」

初春は自分の身体から変な汗が噴き出すのが分かった。なぜだろう、たった一言、『ごめんなさい』というだけなのに。

でも。

だからこそ。

言う。

「ご……ごめ」

その時だった。

後から思い返すと、まるで時間が止まったような感覚に陥った。

ただ視界の端から何か横切り、初春の足もとに落ちた。

そしてそれが不自然に膨らむ。

次に初春の小柄な身体が強引に転ばされた。

それをしたのは、まぎれもない雪人だった。

困惑する初春を、彼は小さく笑い……………

直後、爆発が巻き起こった。

「……………」

はげしい頭痛で、初春は目を覚ました。周囲は騒然となっている。なぜか、初春の近くに誰も寄りつくとはいない。

否、初春に覆いかぶさっていた、何者かの近くに。

「雪人さん……………」

ぽたっ、と初春の頬に何かが落ちた。

それをぬぐうと、それは赤かった。

ドン、という音が聞こえた。

それは、きっかり六時半から始まる、花火だった。

雪人と一緒に観ようと決めていたものだった。

それが照らした少年は、無残に傷ついていた。

パーカーは所どころ破れ、そこから鮮血がにじんでいる。

綺麗な金髪も、べつとりとした液体で濡れていた。

一番ひどいのは右腕だった。

肩のところで、今にもちぎれそうになっている。

「あ……………」

私のせいだ。

すぐ、純粹にそう思った。

もし初春がもつと大人だったら。

もし初春が逃げなかったら。

この少年はきつと、今のように傷つきはしなかつ

ギロリ、と眼球が蠢いた。

初春の思考が、止まる。

それどころか、周囲の人々全員がそうになっていたかもしれない。

それほど少年の瞳は恐ろしく、無慈悲で……………冷たかった。

「ゆ……………」

それでも初春はなんとか声を出そうとした。

呼ぼうとした。

でも、できなかった。

なぜなら、少年の眼には『夏野雪人』の暖かい、とは言わずともぬるいくらいの一温度（碧色）はなく。

ただ冷たい藍色の氷壁が広がっていたからだ。

「……………」

彼は、何かを見据えながら走り去った。

初春など、まるで眼中にないように。

「…………馬鹿だ、私」

一人残され、孤独になった初春は呟いた。

そう、そうなのだ。

記憶がないとは言え彼は、今まで何をやってきたのか、初春は知っていたのに。

「結局、私は雪人さんの事…………何も知らないんだ」

『リア充爆発事件』の犯人は全力で走っていた。

追うため、ではない。

逃げるため。

「畜生、なんだアイツ、俺の爆弾を喰らってまだ、あんなに走れ…

…っ！！」

彼はちよつとした高位能力者だった。

石ころを爆弾に変える能力…………に見せかけた、空気を爆弾に変える能力。

風紀委員ですら欺いたこの能力を、あの少年は一瞬で看破していた。フェイクの石ころには目もくれず、起爆する地点を避けて伏せる。

直撃すれば即死する能力だった。

だが避けられた。

でも隣の少女をかばったがために、決して軽くはない怪我を負った。そこまでなら分かる。

だが、走っている。

「しかも……段々、距離、が」

十数メートル。

「縮まって……」

数メートル。

ゼロ。

ゴッー！

殴られたと気付いたのは、醜く地面に倒れこんでからだった。

「がっ……」

ゴス、ガス！と、視界がブレる。

と、唐突に殴打が止んだ。彼が目を開けると、そこには不思議そうな目をした少年がいた。

彼の右腕は、殴った反動で思い切り千切れていた。いびつな肩口から、思い出したように血がこぼれる。

一番怖いのは、あきらめて左手だけで殴ってくる少年が一切表情を変えない事だった。

気がつくくと、雪人は病院のベッドで寝ていた。

「君の人生はなかなかファンタスティックだね？」

顔を挙げると、おなじみのカエル医者がいた。どうやら、千切れた右手を縫い直したらしい。最新の医療はかなり発達してるな、としみじみと感じる。

「退院はもう少し後かな？まあ、じっとしてなさい」  
もうしばらくすると、初春が来た。

これでもかというくらい、説教された。  
そんなにかと思うくらい、心配された。

不正に風紀委員になりました事、謝りに行きましようと言われた。  
例の事件の犯人、捕まったらしいですよと言われた。

他にも、色々取りとめのない話をした。

でも、何一つ耳に入らなかつた。

なぜなら、流れ込んだ情報の奔流が頭の中を巡り巡っていたからだ。  
すなわち、思いだした。

失っていた、記憶。

爆発の余波によってなのか、それともあの犯人を追っていた時の感  
触が呼び起こしたのかは知らない。

確かなのは、思いだした過去が、本人の思っていた以上に醜かつた  
という事だけだ。

第二十三話 余波がもたらすもの5（後書き）

なんと今回で大覇星祭編は終了です。次回からは雪人の過去話になります。

かなり、というか全部オリジナル要素なので、苦手な方は……頑張ってください！！

## 第二十四話 雪が氷だった頃（前書き）

さて……一応2巻までネタはあるんですけど……遅筆なのでここに表示できるまでどねくらいかかるのやら……orz

## 第二十四話 雪が氷だった頃

それは、学園都市にやってくる前の事だった。

それはもう、信じられないほど蒸し暑い夏の日だった。

その日は『依頼』の帰りだった。傍らのありふれたスポーツバッグには、血塗られたTシャツが突っ込まれている。

少年は駅の古めかしいホームのベンチに座り、アイスクリームで僅かな冷気を補充していた。

と、彼の耳に悲鳴が聞こえた。

そちらを見ると、ホームから落ちたらしい、まだ年端もいかない少女が泣いていた。

「……………」

間もなく三番線を列車が通過します、とアナウンスが聞こえた。

少女がこちらを見た。

彼女の瞳には、ただ冷徹な藍色の双眸が映っていた。

少年は、何の感情もない目で少女を見つめていた。

「……………」

少女は何を思ったのか、おもむろに少年へと手を伸ば

ドガガッ！！と。

無情な鉄塊が肉を潰す音が響いた。

最初から助ける気などなかった。

彼の仕事の都合上、へたに助けて騒がれるよりマシだと思ったのだ

が……  
人身事故により、運転を見合わせております。  
どうやら電車が大幅に遅れるようだ。これならタクシーを使ったほうが早いだろう。  
彼は踵を返すと、ゆっくりと雑踏を抜けて行った。  
何事もなかったかのように。

もし他の者が彼を見ていたら、きっと彼を口汚く罵るだろう。  
それは目の前で核爆弾が発射されようとしているのに、止める努力をしないのと同じだと。  
お前など人間ではないと。  
少年からしたら、その方が都合が良かったのかもしれない。  
その頃の少年は……まるで『人形』のようだったのだ。

少年は、決して裕福ではない国に生まれた。  
他人を欺き、傷つけないと暮らしていけない世界。  
少年はそんな国の特殊部隊として、物心ついた頃から人の殺し方や指紋の消し方を学んでいた。  
そんな彼が十歳を過ぎると、国は彼を国外へと追いやった。  
優秀すぎるが故、裏切りを恐れたためだ。  
そこが、日本だった。  
しばらくすると、学園都市へのスパイを命じられる。  
理由はもちろん、その科学技術を盗んでくるためだ。  
だが、そんな簡単ではなかった。  
学園都市の暗部に目をつけられたのだ。  
追いつめられた彼は、そこで誘われる。

ここなら追っ手も撒けるし、ここで汚れ仕事をやらないかと。その通りだったので、彼は素直に従った。祖国への忠誠など、あるはずがなかった。彼は、利害でしか物事を考えなくなっていた。

彼がつれていかれたのは、『システム』という暗部組織だった。そこには、存在が表に出るだけで常識が破たんするほどのメンバーがいた。

「新しいメンバーが来るって聞いたからすっ飛んできたら……なあんだ男か。って事はオレのハーレムエンドがエンド!？」

なんだか彼とは正反対の性格をした青年、きくろゆういち菊路雄一は嘆いた。

詳しくは知らないが、彼は常人をはるかに上回る運動能力を有しているらしい。

しかも、それは能力ではないらしいのだ。

「ああ？何見てんだコラ。ケンカ売ってんのか？」

お前はどこのぞのヤンキーだ、と突っ込みたくなる台詞を吐いたのは、からなりひおり唐鳴比織。

綺麗な茶髪と整った顔立ちでお嬢様と勘違いしそうなのだが、普段の言動がそのイメージを壊滅させている。

しかも理屈すら知らないが『多重能力』の使い手らしい。

「まあまあそんな凄まないで。可愛い顔が台無しだぜ？」

「うるせえ、死ね」

「……」

まあ、組織間の人間関係は良好のようだ。……多分。

「……もう一人いるって聞いていたんだが」

「ん？ああ、あのクソガキどこ行った？」

「冬季ちゃんの事？だったらそこにいるじゃん。」

くるり、と彼が振り返ると、決して大柄ではない彼の胸あたりまでしか身長のない少女が佇んでいた。急に見つめられたのに慌てているのか、頬を真っ赤に染めている。

というか、そのあたりしか肌が露出していなかった。足もとまですっぽり覆うコートを着こみ、その上顔を斜めに両断するかたちで眼帯を付けている。

「……」

「……」

特に言う事もないので、目をそらさない事から何か少女が言うのだらうとじっと少女を見つめる少年。

じっと見つめられて照れ、目をどうにも離せなくなっている少女。何気に無限ループへと陥っている二人。周りで「ま、美少女の所在のついてはオレにまかせなつて」「ああそうかよ」「大丈夫。比織たんもちゃんと美少女にカウントしてるからさ」「色々キメエ！！」といったやりとりが交わされているが、諸事情で見つめあう二人の耳には入らない。

これが、『人形』のような少年と、『眼』を操る少女との出会いだった。

## 第二十四話 雪が氷だった頃（後書き）

今更の上、分かる方は既におわかり頂けていると思いますが、『システム』のキャラは『ムシウタ』を参考にしております。

「俺は禁書の二次を読んでるんだ。ムシウタ何それ食えんの」な方はすみません。

## 第二十五話 雪が氷だったころ2 (前書き)

依然として感想ページが真っ白です。

随時募集していますので、どんな小さな事でもどうぞお願いします。

## 第二十五話 雪が氷だったころ2

『システム』に入ってから、『依頼』の回数がかなり増えていった。いや断ることはできないから、『任務』とでもいうべきか。

「あ、あのお」

「……何だ」

面倒なので首だけで振り返ると、後ろを歩く少女がビクツと身体を震わせた。

「名前……。なんて呼べばいいのかなあ？」

「いらない」

「で、でもお」

「いらん」

彼にこれといった感情はない。だがそんな彼に小さないらつきを生じさせるほど、少女はしつこかった。

「やっぱり……。名前があつたほうが色々と便利だし……」

「言っておくが、何のために名前をつかう気だ」

彼は足を止め、振り返る。

「今回だって、お前一人で十分だったろう」

少女の後ろで広がっているのは、文字通り血の海だった。

そう、無垢に見せかけて、少女……。多々良冬季は温度変化たたらふゆき（つまり加熱で整形し、急速な冷却を促している）によって生成した『眼』（そのような形状をしているのだ）から凶悪な殺人ビームをバンバン放てる人間兵器であった。

一人で瞬殺できるはずなのに、いつも彼女は彼に同行を求める。

非効率的だ、と漠然と彼は思っていた。

「だ、だつてえ……」

冬季は頬を染め、顔をそむける。

「一人じゃ、その、さびしいからあ……」

「だったら何故俺しか連れていけないんだ。他にもメンバーはいるだろう」

「え、えつとお……」

唯一白い肌を露出している部分がどんどん朱に染まる冬季。だが『人形』たる彼はそんなストロベリーハートに気づけず、

「熱でもあるのか？」

「あつ、わつ、ひゃあああああああ！！」

額と額を合わせようとしたところ、突如生成された『眼』に思い切りブツ飛ばされる。

「ああつ、ご、ごめんなさい！！」

「……いい。平気だ」

「で、でも血があ……。あ、そういえばばんそうこうが……」

「ごそこそと黒コートのポケットをまさぐり、慌ててばんそうこうを少年を額に貼る冬季。だが今にもはがれそうな上、ばんそうこうでは止めきれないほどの血が流れている中、その応急処置は果たして役に立つのだろうか。」

「やっぱり、名前、必要だと思つのお」

帰りの車の中、少女は呟いた。

「……勝手にしろ」

「ねえ、本当は名前そのものがないんでしょお？」

「……」

「だったら、私がつけてあげるっ！」

急にテンションがあがったので、何事かと彼は少女を振り向く。

「えーと、えーとお……おそれひびょうが恐火氷牙。いい名前でしょお？」

そう言つて笑つた少女はともうれしそうで。

数年経つた今でも、なぜか鮮明に脳裏に焼き付いている。

「ねえ、ひょうがあ」

「……」

「ねえったらあ」

「……」

「ねえっ！！」

ゴスツ！！

「うごおおおおお……っ」

『システム』の隠れ家で折角心地よく眠っていたにもかかわらず『眼』で腹を強打され、彼……少女から与えられた名前という恐ろしい火氷牙……は赤ん坊のように身体を丸める。これは特殊な訓練を受けた彼だからこそ軽傷で済んでいるのであり、一般人にやると恐らく筋組織への莫大なダメージは避けられないだろう。

あまりにもしつこくつきまとってくる少女をいなす度に何気に言葉数の増えている氷牙は、忌々しげな表情を意識的に作ると身体を起こす。

どうも『表情』というものをみせると冬季はしつこさが少し減る気がする。少し減るだけでも氷牙にとっては好都合だった。なぜなら無視するたびに『眼』が飛んでくるからだ。

「……何だよ？」

「『任務』が来たからあ……一緒に行くお？」

そういつと冬季は二ヘラとしまらない笑みを浮かべた。だが氷牙はまだまだ寝足りないのので、無視して再びソファに横になる。

ならばと『眼』を生成した冬季の肩を、誰かが優しく叩いた。

仲間である、菊路雄一であった。

「まあまあ冬季ちゃん。ここんところずっとお仕事任せてたし、今日は俺らに任せてよ。ね？」

「待てコラ。俺らって事はオレ様も行くのかよ」

「あつたりまえじゃ〜ん。俺らはベストカップルだもんねえ」

「変な言い方すんなつ!!！」

「でも二人とも、相性いいよねえ？」

「……ッ。うるせえ!!！」

「……」

氷牙は寝返りを打った。

こんな気持ち初めてかもしれない。

ここに少しでも長くいたい、なんて。

心地良い、という感触は、『人形』のような彼に初めて生まれた感情なのかもしれない。

そしてそれを生んだのは……まぎれもない、冬季をはじめとした『システム』のメンバーだったのは言うまでもない。

そして彼に第二の感情が生まれるまで、そう時間は掛からなかった。それは再び、『任務』の帰りの車の中の出来事だった。

その日も冬季は何かと理由をつけて氷牙を引っ張りまわし、やけに疲労していたのを覚えている。

「……あ」

「どおしたのお？」

「停める」

彼は短く運転手に命令し、車を止めさせた。ドアを開け放ち、小走りに『それ』に駆け寄る。

『それ』は一本の街路樹だった。

正確には、それに手を伸ばしている幼い少女だった。

「どうした？」

自分でも驚くくらい優しい声が出て、氷牙は少女から目を背ける。なぜだか、優しいお兄さんと思われるのに抵抗を感じた。生まれてから一度もそんなふうに思われた事がないからかもしれない。

「あれ……」

少女が指をさした先には、鮮やかな色彩の風船が街路樹に引っかかっていた。

「ふうん？ベッタベタねえ」

いつの間にか後ろに追いついていた冬季が呟く。つまらなそうにしているのは一体なぜだろうか。

「待ってる」

少年は低く身を沈めると、一息で三メートルの高さに到達、風船のヒモを掴んで綺麗に着地した。無愛想に少女にそれを渡す。

少女は啞然とした様子で、

「……お兄ちゃんすごーい……」

「そうでもない」

これでもかというくらい無表情で、氷牙は答える。

「俺の仲間は、百メートルは余裕らしいからな」

「へえ〜。百メートルってどれくらい？」

「話が弾んでるとこ悪いんだけどお」

唐突に、冬季が口を挟んだ。表情、声色両者から不機嫌オーラをにじませている。

どうでもいいが、氷牙は初めて、こんなにも冬季がムスツとしているのを見た事がなかった。

「……すまん。急用があった」

「うん分かった。じゃあねお兄ちゃん！」

手を振る少女から離れ、車に乗り込むと冬季が言った。

「ずいぶん優しいじゃない？『お兄ちゃん』」

一瞬、車が揺れた。

運転手が思わずハンドルを切ってしまったからだ。

それほどまでに、冬季の言葉は『冷たかった』。

だから氷牙は言った。

「だからなんだ」

車が急ブレーキをかけた。

運転手が思わずやってしまったらしい。「すみません」と謝りつつ、

運転手はアクセルを踏む。

「べつつにい？」

「何故怒っている？」

「だってえ、暗部なのに自分から姿見せにいたりい、あとお……」

急に冬季がしゃべらなくなった。

他に何も思いつかなかつたらしい。

ふと、氷牙は以前菊路雄一から聞いた話を思い出した。

『もし冬季ちゃんがすねちゃつたらこう言ってみ？「俺にはお前だ

けだ」ってさあ』

彼の言葉は性格からするに信用ならないが、何も手掛かりがないよりマシだろう。

彼は平気だが、そろそろ運転手のメンタルがやばそうだ。

「冬季」

「なによお？」

「心配するな」

「……なにがあ？」

氷牙は小さく息を吸って、言った。

その一言で色々な辛い事や苦しい事を自ら背負う事になるうとは、まだろくに感情の芽生えていない『人形』には想像すらできなかった。

「俺には、お前だけだ」

「……、ふえっ!？」

一瞬の後、冬季の顔が一瞬にして真っ赤に染まった。急にアタフタ

し始める。

「……………どうした？熱でもあるのか？」

完全にストロベリーハートを理解できなかった氷牙が自分の額を冬季のそれに近づけると、突如生成された『眼』が氷牙を車の外へとふっ飛ばす。

とっさに受け身を取った氷牙よりも、送迎のはずが色々と精神的によろしくない場面を見せられた運転手のほうがよっぽど被害が大きかったに違いない。

第二十五話 雪が氷だったころ2 (後書き)

よく考えてみると、もう9月ですね。

いつも通り中間や期末の前は更新が滞る予定ですので、あしからず。

第二十六話 雪が氷だったころ3 (前書き)

うわーいすげーお久しぶりですー (投げやり)

## 第二十六話 雪が氷だったころ3

どんな物語にも、終わりはある。

とくにそれが過去の話ならば、オチが分かりきっているのではなおさらだ。

では、そろそろ。

オチ……現在へつながる話をしよう。

彼……とある少女からは、恐火氷牙と呼ばれている少年のもとに届いたのは、なんてことはない、ただの暗殺任務だった。

とはいえ、これは異例の事態であった。

普段は、『システム』という組織そのものに『電話の人』から指令が行く。

だが今回は、恐火氷牙という個人にオーダーが来たのである。

「どうなっている……?」

「いいじゃん、どうだってえ」

「がばつ、と冬季がおぶさつてくる。氷牙は「重い」といつてどかす。

「……まあいいか」

よく考えると確かにどうでもよかった。

「じゃあ早くいこお?」

「いや、来るな」

「え?」

「勘違いするな。……たまには自分で仕事しないと身体がなまってしまっ

そう言つて冬季の頭をなでる。彼女は嬉しそうに目を細めた。実際、身体はなまっていたのであった。

大した事のない任務だ。とつとと終えて帰ろう……

真夏の道路を歩きながら、氷牙は汗だくでオーダーの記された紙を開いた。

そして、汗が嫌な脂汗になった。

「…………お兄ちゃんすごい…………」

まさか。いや。そんな。

あの子は、暗部とは関係ない、ただの子供ではなかったのか。まさか関係があつたのか。

“うん分かつた。じゃあねお兄ちゃん！”

参考用に添付されていた写真。そこには。

先日風船を取つてやった少女の、笑顔が写っていた。

「……………」

ガラにもなく、絶句する。

何度読み返しても、その非情な四文字は変わらない。

「俺、は……………」

震える唇を無理やり動かして、ようやく言葉が口から出た。

「どうすれば、いいんだ……………」

『人形』恐火氷牙に芽生えた第二の感情。

壊したくない。

それが今、凍りついた心を叩き割ろうと暴れるのだった。

その時。

「…………お兄ちゃん？」

バツ！と、氷牙は振り返る。

うだるような暑さの歩道。そこに、いた。

先日風船を取つてやった少女。

氷牙の汗が、一層量を増した。

「ちよ、ちよっとお兄ちゃん？どこ行くの？」

学園都市の『眼』の外だ、と氷牙は口の中で呟いた。

彼は今、少女の手を引いて路地を進んでいる。

目指すは人工衛星の視覚から逃れる場所だ。残念ながら、そんな都合の良いところは地下くらいしかない。その中で、人目につかずに移動できるとなると、もう下水道だけだ。それでもいい。

例え汚水の中を泳ぎ続ける事になろうとも、別に何の感慨も抱かない。

祖国を裏切った時のように。

そのはずだった。

裏切る事は慣れっこのはずなのに。なぜか、『システム』の面々が脳裏に浮かぶ。

(ダメだ。振りきれ)

そう頭の中で念じて、氷牙は歩を進める。

そうだ。もうあそこへは戻れないんだ。

何度も何度も言い聞かせて、ようやく雑念を捨て

カッソ。

数メートル先に、真黒いコートをはおった少女がいた。

頭が真っ白になった。

「ねえ、ひょうがあ」

普段は飴のように甘いその声色は、今はドロドロに溶けた砂糖菓子



をふるわれるかのような錯覚すら覚える。

とっさの攻撃に、密かに受けていた時間割の成果…能力を発動する時間もなかった。

なんとか目を開けると、もうその地形は大きく変わっていた。

「うぐ……あいつは……？あの子供は……？」

朦朧とする頭で辺りを見渡す。だがあちこちに粉塵が立ち込めていて、とても人影など……

いや、いた。

こちらに向かつて歩いてくる小柄な影。数は一人。氷牙は目を凝らす。冬季か例の少女か、まさに究極の二択だった。

その人影が、近づいて、近づいて、近づいて、はつきりと、姿を現した。

結論。

二人ともいた。

冬季と、少女。

ただし。

後者には、下半身がついていなかったけれど。

「は……」

茫然とした眩きが浮上し、一瞬で熱線の予熱で蒸発する。認めたくない。でも、彼の視覚はこれでもかというくらいに氷牙に現実を突きつける。

べちゃ、と少女の上半身が地に落ちる。

冬季が、無邪気な少女だったモノを投げ捨てた音だった。

「もう、いいよねえ」

冬季は呟いて、ブチリと引き裂くような笑みを浮かべる。

「約束、したのに。私だけって、言ったのに」

そこらじゅうの壁や地面が歪む。それらは即座にバスケットボール状の『眼』へと変貌し、青白く瞬いていく。

「私のものじゃないひょうがなんて、いらなあい。そうでしょ、」  
一瞬だけでいい。氷牙は思考する。

わずかでも冬季の気をそらす事ができれば、その隙に能力を発動させる。

未だ詳細の不明な能力だが、それに賭けるしかない。

「ねえ、ひょうがあああああああああああああああああああああああああああつ！！！」

光が最高潮に達した。もうやるしかない。冬季を傷つけ、生き残る。生き残った先に何があるかは分からない。

そこには絶望しかないのかもしれない。

『システム』を裏切り、大切なものを壊してまで生きる意味はあるのだろうか？

動機はない。

でも、前に進むしかない。

今まで彼が潰してきた彼らの未来は、氷牙が責任を負う。

「ごめんな、」

氷牙は呟く。

ふ ゆ き 。

恐火氷牙は初めて、自分を認めてくれた少女を名前で呼んだ。

冬季は途端に表情を崩れさせる。くしゃくしゃになって、言う。

「ずるいよお、ひょうがあつ」

そして。

二つの能力は暴走し、何もかもが吹き飛んだ。

恐火氷牙の能力。

空間そのものを自由に操るチカラ。

まだ名前のついていない能力に、氷牙はその時名をつけた。

シンワールド  
罪世界。

暫定的に決闘世界と書庫に登録していたっけ、と氷牙はぼんやりと考える。

頭は朦朧としていた。暴走の影響だろう。

もう足がどこに向かっていたかも分からない。ただ惰性で動かした。ようやく足がもつれ、ゆっくりと倒れる。そこはどうやら、どこかの学生寮のようだった。そういえばずいぶんと階段を上ったような気もする。

薄れゆく意識の中で、氷牙は思った。

この罪を忘れる事が、最大の罪なんだろうな、と。

そして恐火氷牙は全てを失った。

そして夏野雪人となった。

でも。

恐火氷牙の在りし日を思い出した自分は、いったい誰なのだろうか？  
記憶を失った原因は分かっていない。

もう一度彼らに会えたらどうなるのか。自分はどつするのか。

……分からない。

そうして『彼』はベッドに再び横になり、

大覇星祭は終了した。



第二十六話 雪が氷だったころ3 (後書き)

……次回はもっと早く更新できるようがんばります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1290s/>

---

とある科学の決闘世界(デュエルワールド)

2011年11月15日23時56分発行